

# ながいの歴史

長井盆地は西高東低、南開北閉の地形で人々が住みやすく、古代から現代まで豊かな暮らしが営まれてきました。縄文時代には、古代の丘周辺や最上川の流域に、人々が住みついて集団生活をしていました。平安時代には、坂上田村麻呂とお玉の悲話や卯の花姫の悲恋物語があり、中世には長井氏と伊達氏との戦い、あの片倉小十郎で有名な片倉一族の活躍などがありました。

最上戦争での畑谷、長谷堂の戦いでは、直江兼続がこの長井の地（伊佐沢）を通り、御楯稲荷神社で勝利を祈願しながら戦場に向かっていきます。江戸時代に入り商品経済が進むと、上方との取引が盛んになり、米沢藩の代表的な川港として宮船場が開設されました。江戸時代の末には長井は最上川舟運の影響もあって、藩内で有数の商業の町といわれるまで伸びていきます。明治になると、中央集権的な枠組みの中で郡制が布かれ、西置賜郡役所が置かれたため、長井は西置賜

の経済、行政の中心の町としてその役割を担っていきます。産業面では繊維、電気産業の町として、県下でも工業生産高の多いまちとして知られていくようになります。昭和29年に長井町、長井村、西根村、平野村、豊田村、伊佐沢村の1町5ヵ村が合併して新しい長井市が誕生しました。平成26年には、その市制施行から60周年を迎えており、益々の発展が期待されています。



【昭和30年代 中央商店街のにぎわい】

## 1 原始・古代

西暦	紀元前	1	2	3	4	5	6	7世紀	8世紀	9	10	11世紀	12
長井（置賜）の出来事	二万年前 長者屋敷遺跡で杉久保型ナイフが使われる	三万年前 高島町押出遺跡で漆ぬりの土器	四万年前 四本柱が建てられる（長者屋敷遺跡）	四世紀 川西町天神森古墳が築造	四世紀 南陽市稲荷森古墳が築造	五世紀 陸奥国優曇曇郡（置賜地方）に含まれる	七世紀 出羽国が成立	八世紀 長井盆地の南部および最上川上流の白川以北一帯で集落が発達。（長井郷と想定される）	八世紀 坂上田村麻呂、エミシのアテルイと戦う			十一世紀 一〇八三〜後三年の合戦（一〇八七）奥州では安倍貞任の伝承が多く残される	十二世紀 二八五 壇の浦平氏滅亡 二六七 平清盛が太政大臣になる
全国の出来事			二三九 邪馬台国卑弥呼が魏に使いを送る		五九三 聖徳太子が摂政となる	六四五 大化の改新	七〇一 平城京に遷都 七〇四 大宝律令制定	七九七 坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命される 七九四 平安京に遷都	八六六 藤原良房が摂政になる	九三五 平将門の乱	一〇六九 後三条天皇が莊園整理令を出す	一〇六六 藤原道長が摂政になる	
時代	旧石器時代	縄文時代	弥生時代	古墳・飛鳥時代				奈良時代			平安時代		

## 1 原始時代

三方を山地に囲まれ大小河川が発達した長井盆地は、古くから人々の生活の場となってきました。当時は狩猟・採集の時代で、クリやクルミ、トチなどの堅果類をはじめ、シカやイノシシ、魚や山菜などを食料としていました。特にトチの実<sup>けん かるい</sup>は手軽に大量に採集され、アクを抜き粉状にすることで保存ができる食べ物でした。これとは別に、秋に遡上するサケも縄文人にとって貴重な食料となりました。干物や燻製などに加工され、冬季間の保存食として必要不可欠な食べ物でした。

市の中央、十日町郵便局の所からも住居跡や縄文土器が多数発掘されました。(宮遺跡)ここは、最上川と野川と東山に近く豊かな食糧に恵まれ、集落ができたと思われます。

## 3 長井の遺跡

### ●縄文時代

長井市内では、現在230ヵ所の遺跡が見つかり、旧石器時代から近世までの時代に分類されます。発掘調査が行われた遺跡として、西根地区の長者屋敷遺跡があります。西山山麓に所在し、旧石器、縄文、弥生時代の土器や石器が出土し、中でも縄文時代中期(約4,000年前)のムラの跡が発見されました。住居跡は半地下式の竪穴住居で、中央部の広場を囲むように環状に配置されていました。特徴的な施設跡は4本柱跡があり、季節の節目となる春、秋分の時期に朝日を望むと、柱列の中央部から日の出が観察できます。



↑4本柱を復元、秋分の時期の日の出を望む(長者屋敷遺跡)

## 2 古代

古墳時代も後半になると、長井市域でも古墳が造られるようになります。古墳の造営は地域リーダーに与えられた特権で、大きさや形態は中央勢力との結びつきを示すもので、長井盆地も飛鳥地方の影響下にあったと考えられます。

その後、畿内<sup>きない</sup>を中心に天皇を頂点とする中央集権国家が確立します。中央勢力は7世紀末に置賜盆地に入ってきます。長井市域では9世紀代の埴ノ上遺跡<sup>ままのうえ</sup>(平山地区)や台遺跡(中央地区)が当時の役所的機能をもった遺跡と考えられています。

### ●古代

市街地中央部の台遺跡で、平安時代(約1200年前)の集落跡が発見され、竪穴住居<sup>ほったてばしらたてもの</sup>跡、掘立柱建物<sup>あとかわあとちゆうれつあと</sup>跡、河跡、柱列跡などが検出されました。柱列跡は長さ30mにおよび、塀で囲まれた施設跡と推定されます。

また、須恵器<sup>すゑき</sup>とよばれる土器底には「市」、「生」、「吉」という文字が墨書きされ、仏教に関わる祭祀<sup>さいし</sup>が執り行われていたと推測されます。したがって、台遺跡は長井郷の中心的な役割を担った遺跡のひとつと推定されます。

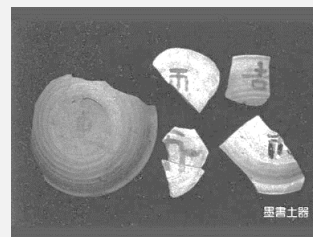


←復元された竪穴住居(長者屋敷遺跡)



←発掘された建物跡(台遺跡)

↓墨書きされた須恵器(台遺跡)



## 2 中世

## 1 中世の長井

## (1) 古代の終わりから、中世のはじまり

平安時代、長井は出羽国置賜郡に属し、古代の郡から荘園まで入り込んでいました。置賜郡は成島荘、北条荘、屋代荘などに分かれ、残るところが公領置賜郡となっていました。鎌倉時代になると、置賜一円を長井荘とよんだり、上長井荘、下長井荘と、わけることもありました。

10世紀になり、東北地方を支配するために中央から役人が送られてきますが、それには関東地方の名族ある平氏、藤原氏、源氏らが任命されました。これに対して、在地の豪族である安倍頼良が反乱を起こして税を納めなかったので、京都にある朝廷側は源頼義、義家を派遣して鎮圧しました。

これが「前九年の合戦」です。11世紀末には「後三年の合戦」も起こりました。

合戦がおさまると、藤原清衡が平泉に、政庁や中尊寺で構成される中世都市を構築し、長く繁栄をほこりました。

## (2) 平泉藤原氏の滅亡(古代の終わり)と鎌倉幕府

平家を倒して勢力を強めた源頼朝でしたが、政権の基盤を強固にするためには、奥州藤原氏を打倒する必要があります。四代目泰衡の時代になると、鎌倉の圧力に屈して義経の館を焼いてしまいました。その後、建久3年(1192)、源頼朝は征夷大將軍に任命されました。

奥羽合戦に勝利した頼朝は、論功行賞を行い、関東御家人に新しい領地を与えました。長井を含む置賜地方には、大江氏が地頭として選ばれ、長期にわたり支配していきます。この長井時代のものとして五十川西館の大日板碑(県指定文化財)や飯沢文書(県指定文化財)などが伝わっています。



西暦	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
長井の出来事	二八 長井氏の時代		二三八 馬頭観音堂再建 前長門守春朝 二三七 長井庄地頭、長井貞頼 北朝より出羽守に任命 二五八 飯沢文書記される (県指定文化財) 二五九 宗遠 置賜各豪族に安堵状を出す 以後伊達氏の時代 二六〇 鮎貝成宗鮎貝城完成	二四一 下長井遍照寺僧有日入寂す 二四二 僧有日、宮村遍照寺を中興す	一五七 政宗 鮎貝城を焼討 一五八 小出村白山権現社再建
全国の出来事	二八九 奥州平泉藤原氏滅ぶ	二九二 源頼朝 征夷大將軍に任命される 二九三 弘安の役 二九四 文永の役 二九五 僧徒の兵杖禁止令 二九六 承久の乱	二九七 幕府徳政令発布以後頻発 二九八 鎌倉幕府滅亡 建武中興 二九九 室町幕府京都に開く 三〇〇 足利基氏関東管領	三〇一 足利義満 金閣寺建立 三〇二 南北朝統一 三〇三 幕府と関東管領 対立 三〇四 応仁の乱(一七七)	一五七 秀吉 太政大臣となる 一五八 豊臣秀吉 惣無事令 一五九 本能寺の変 一六〇 足利幕府滅亡 一六一 織田信長桶狭間の戦い 一六二 天文の乱(一四八)
時代	鎌倉時代			室町時代	

### (3) 中世の争乱

天授6年(1380)頃、福島に勢力を持っていた伊達宗遠<sup>だてむねと</sup>が置賜地方に侵攻し、長井氏は置賜を放棄しました。大永2年(1522)に伊達植宗<sup>たねむね</sup>は室町幕府から陸奥国守護に任命され、さらに、植宗は天文元年(1532)に居城を置賜に直結する桑折に移し、七ヶ宿街道を通った長井地方を狙いました。天文11年(1542)には、植宗と晴宗親子による争い「天文の乱」が起きました。このとき、野川周辺も戦場となりました。

天文の乱では、長井地方の農民も両派に分かれ、7年間にわたる戦をくりひろげました。両派は和睦し、植宗は隠居、晴宗は家督を継ぎ米沢城を本拠と

しました。永禄10年(1567)、伊達家17代政宗が米沢で生まれ、その重臣として片倉小十郎<sup>かたくら こじゅうろう</sup>が登場してきます。

天正18年(1590)、豊臣秀吉<sup>とよとみひでよし</sup>の小田原攻めに政宗は遅れて参陣し、秀吉にくだりました。同年に「奥州仕置」が行われ、伊達政宗は岩出沢城(後の岩出山城)に転封になり、蒲生氏郷<sup>がもうじさと</sup>が米沢に入ってきました。こうして秀吉による全国統一が成され、長く続いた戦乱は終わりました。

平成7年の県の中世城館址調査で、長井市内には46カ所の館跡が報告されていますが、こうした激しい戦いのあとを物語るものといえます。

## 2 長井氏の時代

### (1) 鎌倉時代の長井氏

文治5年(1189)、奥州合戦で功績のあった大江広元<sup>おおえひろもと</sup>の次男時広<sup>ときひろ</sup>は、長井荘(現在の置賜地方)の地頭になり、長井氏と名乗りました。おなじく、藤原朝宗<sup>ふじわらのあさむね</sup>の子も軍功によって伊達郡に移り、伊達氏と称するようになりました。

長井氏は代々幕府の中核にあり、引付衆や評定衆を担当していました。置賜で地頭となった長井氏は宮内の熊野宮、成島八幡などを修復し、屋代の資福寺<sup>しふくじ</sup>を建立しました。

### (2) 大江氏と長井氏について

建暦3年(1213)、「和田氏の乱」を鎮圧した北条氏は所領を全国に拡大し、幕政を強化していきました。この和田氏の乱での功績により、大江広元には横山荘(八王子市)が与えられ、所領は武蔵、相模、備前、備後、出羽の5カ国となりました。大江総領家は横山荘で、長男<sup>ちかひろ</sup>の親広<sup>ちぎょう</sup>の知行地は出羽、寒河江荘で分領です。

### (3) 鎌倉幕府滅亡と南北朝時代の長井氏

大江総領家の領地は、戦乱の中で敗れたため、長井氏に譲られました。3代の時秀<sup>ときひで</sup>のときです。その家臣<sup>おおす</sup>、大須賀長任<sup>ながとう</sup>は小出に居館を築き、「新館<sup>あらだて</sup>」といわれ、館町の起源となりました。

鎌倉幕府滅亡で6代広秀<sup>ひろひで</sup>と一族は足利尊氏<sup>あしかがたかうじ</sup>の側近として仕えました。一方、伊達氏は長く南朝方の北畠顕家<sup>きたばたけあきいえ</sup>一族の最有力武将であり、関東地方まで出陣し、南朝方の回復に尽力しました。

### (4) 長井氏の終焉

貞和4年(1348)の成島八幡宮の棟札に、「幕府引付衆長井時春<sup>つげしゅうなが い ときはる</sup>」の名が記されていますが、これが長井荘の地頭として最後のものです。

長井道広<sup>なが い みちひろ</sup>は大江長井氏の系図にはありませんが、一説によると、道広は評定衆筆頭<sup>すだてしゅう</sup>の要職で八王子の片倉城の建設、名刹<sup>こうあんじ</sup>広園寺の開基などに努めたそうです。

長井氏は、武蔵の横山荘(八王子市)を中心に武蔵、相模で勢力を持っていましたが、関東公方の内紛により、永正元年(1504)に滅亡しました。

### ■ 長井氏と繋がる毛利家

大江広元の四男季光<sup>すゑみつ</sup>は、大江総領家を継ぎ、関東評定衆であり、相模毛利荘(厚木市)地頭でもありました。北条時頼<sup>ほうじょうときより</sup>に抵抗した三浦氏と一緒に自刃し、三浦氏とともに滅びます。季光の子孫は長井氏に養われました。長井氏の本拠である片倉城落城<sup>おろ</sup>のとき、大江師親<sup>おおえ もろちか</sup>(後の毛利元春<sup>もうり もとはる</sup>)は、安芸に逃れ、地頭の地位を固め長州毛利家となりました。

大江家と長井氏と毛利氏の家紋「一文字三つ星」は大江広元が決めたといわれています。



### ■ 長井氏の文化

長井氏は、武人と行政家に人材を多く育てました。4代宗秀<sup>むねひで</sup>や6代広英<sup>ひろふさ</sup>、8代広房<sup>ひろふさ</sup>の短歌は勅撰集<sup>ちよくせんしゅう</sup>に3名で120首も載っています。当代一流の歌人でした。その後の私撰集<sup>しせんしゅう</sup>にも、一門の和歌が収められています。宗秀と5代貞秀<sup>さだひで</sup>は蔵書家として知られ、長井文庫は中世の学術振興に役立ち、金沢文庫とともに宮内庁書陵部に保存されています。中国から伝来の茶の湯を、将軍家や貴族だけから、武士に普及させたのも長井氏です。

## 3 大須賀氏の一族

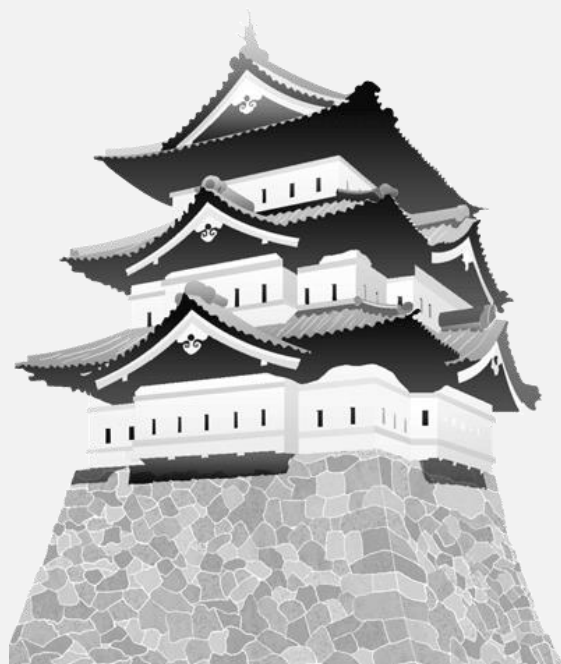
鎌倉時代、大江時広が長井荘の総地頭に任じられましたが、長井氏の小出村の地頭には大須賀長光という人物が命じられたと言い伝えられています。大須賀氏の出身は利根川下流の大須賀郷です。

長井の居館は、新館といわれました。東西112m南北70m約1ha、長方形の屋敷で、その外側に幅6mの館堀を作り、内側にその土を盛り上げ土塁とした環濠<sup>かんごう</sup>武家屋敷です。また、館内には長遠寺と白山宮を勧請し、白山神社を建立しました。

大須賀氏の役割は、村の政治と税の取り立てでしたが、館の中に田や畑、小作人の家もありまわりに家が建ち、小出村の発祥の地となりました。長光は文永3年(1266)に46歳で死去しています。その子孫は、出家し、領地が長井氏から伊達氏に代わってからも、寺にこもり伊達氏には仕えず、長井の地で長く暮らしていました。

## 4 長井氏に仕えた新田遠江守<sup>にっ た とう みの かみ</sup>

新田遠江守は、平泉藤原氏の庶流の子孫であり、米沢の館山城主で長井氏に仕えた豪族です。伊達宗遠<sup>ぼうちん</sup>に謀殺され、歌丸の金鐘寺に多層塔の墓があります。



## 5 伊達氏の時代

### (1) 伊達氏系図

①朝宗・・・⑧宗遠 — ⑨政宗(儀山) —  
⑩氏宗 — ⑪持宗 — ⑫成宗 —  
⑬尚宗 — ⑭植宗 — ⑮晴宗 —  
⑯輝宗 — ⑰政宗(貞山) — ⑱忠宗・・・

### (2) 伊達氏の置賜支配

天授6年(1380)、伊達宗遠が置賜地方を侵略しました。当時、置賜地方は長井氏の支配でしたが、現地を代官に任せて、警戒が手薄でしたので、伊達氏から狙われることになりました。宗遠の代には屋代、米沢、南陽を掌握します。その後、9代政宗のときに、長井氏を破り置賜全体を支配しました。

### (3) 伊達領国の展開

宗遠の父行宗は南朝方(宮方)の武将で、長井氏は北朝方(武家方)でした。南北朝、両派のもみ合いが続く中で、置賜地方では南朝方の伊達氏が長井氏に勝り、力を伸ばしていきます。片倉氏や萩生の国分氏などの土豪も、伊達氏に近づいていきました。

11代持宗<sup>もちむね</sup>のときに、白鷹町高玉の瑞龍院<sup>ずいりゅういん</sup>を開いたという記録もあり、15世紀初頭までには伊達、信夫とともに、長井地域も伊達領国の中核になっていきました。

#### (4) 天文の乱 植宗と晴宗

植宗と晴宗の親子の争いは、伊達家中ばかりでなく奥州中、南部を巻き込んだ騒乱でした。この発端は、植宗の三男時宗丸の越後上杉家への養子問題です。天文11年(1542)から7年間、両派入り乱れて争いました。このとき、長井市域も戦場とな

り、特に野川下流域での戦いは激しいものでした。この争乱で勝利した晴宗は置賜地方の武士たちを伊達家家臣団として取り組むと同時に、米沢城を建設し、本拠地としていきました。

### 6 伊達政宗(貞山)

天正12年(1584)、伊達家の相続内紛があり、輝宗は18歳の政宗に家督を相続させ、隠居しました。以後、小手森城合戦、人取橋の合戦から始まり、父輝宗の仇討ちである二本松城攻撃と続けました。

天正17年(1589)には、秀吉と仲の良かった蘆名氏を攻め滅ぼした後(摺上原の戦い)、周辺の大名と天正18年(1590)まで合戦を続けていました。

秀吉の「惣無事令」(大名間の戦闘を中止する令)に背き、合戦を続けたこともあって、小田原参陣で安堵された置賜から陸奥国玉造郡(現在の宮城県大崎市岩出山)に移封されました。



### 7 片倉小十郎とその一族

#### (1) 片倉家の由来

片倉家の名が初めて出てくる資料は、永正6年(1509)の13代伊達尚宗が出した出陣要請の回状です。これには、片倉右京の名前が出てきますが、すでにこの地方の有力豪族でした。

#### (2) 梵天丸と喜多と小十郎景綱

羽州米沢八幡の神主である片倉式部景重は、直子と再婚し、弘治3年(1557)、男児を出産し「小十郎」と名付けます。母の舅に、飯田小十郎という武の誉れ高い人物がいましたが、彼を慕い、以後、片倉家は代々小十郎と号しました。

平成25年白石市教育委員会編集の「片倉代々記」に、「弘治3年(1557)羽州置賜郡下長井荘宮村で生まれる」とあります。晴宗公采地下賜録によると、片倉式部は黒沢と小松に領地を与えられています。片倉家系図には、片倉式部少輔景重、羽州置賜郡屋代荘八幡宮神職領百貫とあります。

小十郎には、18歳年上の姉、喜多がいます。美しく聡明で、祖父鬼庭元直に愛されて学問と武芸を仕込まれました。梵天丸(政宗の幼名)が生まれると乳母(教育係)になり、後に、政宗に嫁いだ田村家の愛姫の侍女となりました。

小十郎は、9歳の天正3年(1575)のとき、梵天丸の傳役(指導役)に任じられ、姉の喜多とともに教育にあたり、政宗が成人しても、ともに側で仕えました。

梵天丸は幼児の頃、疱瘡の毒で右目を失明し、右目の肉が腫れ上がって目じりの外に出たのを、小十郎がいきいきに切り取りました。鬱屈していた梵天丸は、目の荒療治で明るい性格を取りもどし、まわりの人々は、小十郎にいつそう信頼を寄せたといわれています。

### (3) 片倉壱岐守景親

天正2年(1574)、伊達輝宗のときの史料に「壱岐守の軍勢は馬上72騎、鉄砲23丁など総勢417名」とあり、新田殿633名に次ぐ出陣をしています。

壱岐守は晴宗から政宗の3代に仕え、軍奉行を務め、後に意休斎と称しました。

晴宗公采地下賜録には、片倉壱岐守に天正11年6月までの知行の通りと、宮村の支配を認め、片倉伊賀守は下長井成島などが知行されたとあります。

片倉家系図では、景親の子頼久と小十郎景綱が縁組をして、片倉総領家を継いでいます。壱岐守は、税を免除された片倉館主です。

### (4) 政宗と景綱

天正5年(1577)、政宗が元服しますが、そのとき、小十郎景綱は剃刀役を務めます。景綱は、天正12年(1584)から下長井で奉行を務めています。同年、羽州置賜郡下長井莊宮村片倉館で子どもが生まれ、彼が2代目小十郎重綱(のちの重長)となりました。

天正14年(1586)、景綱は大森城主(現在の福島市)を命ぜられました。片倉代々記には「羽州長井莊片倉館より奥州大森城に移る」とあります。

政宗は小田原で本領を安堵されましたが、天正19年(1591)長井、米沢など父祖伝来の置賜地方の

領地が没収になり、大崎の領地が与えられ岩出山に移されました。景綱も5年間務めた大森城を後に、与えられた亶理城に移りました。

### (5) 小十郎景綱の死

江戸時代になり、伊達政宗は仙台に城を築き、片倉小十郎景綱は白石城主となって、1万8千石を給されました。徳川家康は景綱を陪臣ながら、大名と同じ扱いにし、一国一城令の中、伊達家だけは仙台と白石の二つの城が認められました。

景綱は元和元年(1615)、59歳で亡くなりました。遺言によって墓地には杉が一本植えられ、景綱の雅号「傑山」にちなむ、常英山傑山寺(臨済宗、白石市)に葬られました。杉は巨木となり、傑山寺の墓所にそびえています。

### (6) その後の片倉家

2代目片倉小十郎重長は、豊臣家が滅亡する慶長19年(1614)の大坂夏の陣に参戦し、真田幸村勢と戦い武功をあげました。

この戦いの中で、幸村の一人の息子と四人の娘を助け、白石に匿いました。長女の阿梅は、後に、重長の後妻になり、養子を迎え、3代目小十郎景長として育てました。

## 8 桑島将監の一族

桑島将監は、伊達政宗の家臣で、伊佐沢周辺を治めていました。上伊佐沢の館久保内には、現在も館堀跡が残っています。

小松蔵人はあら町の商人代表と思われます。将監は、伊達氏から派遣された町奉行的な役割をもった人物と考えられます。

また、伊達氏は金と馬を都へ運び驚かせていますが、その馬の世話をしたりしたのが桑島家でした。

将監は、妻のお玉と息子の供養のため、菩提寺玉林寺を創建し、遺品を埋めて桜の木を植えました。それが成長して、現在の久保ザクラになったともいわれています。

玉林寺は、永禄12年(1569)に建立されましたが、お玉の戒名「当本開基如意院殿玉林妙江大姉」の字をもらい、寺の名前としました。伊達家の岩出山へ

の移封には従わず、出家して高野山へ向かいました。

桑島氏と馬のかかわりに関する資料は山形県史でも紹介されており、桑島氏の花押は馬の横顔に似ていることでも知られています。



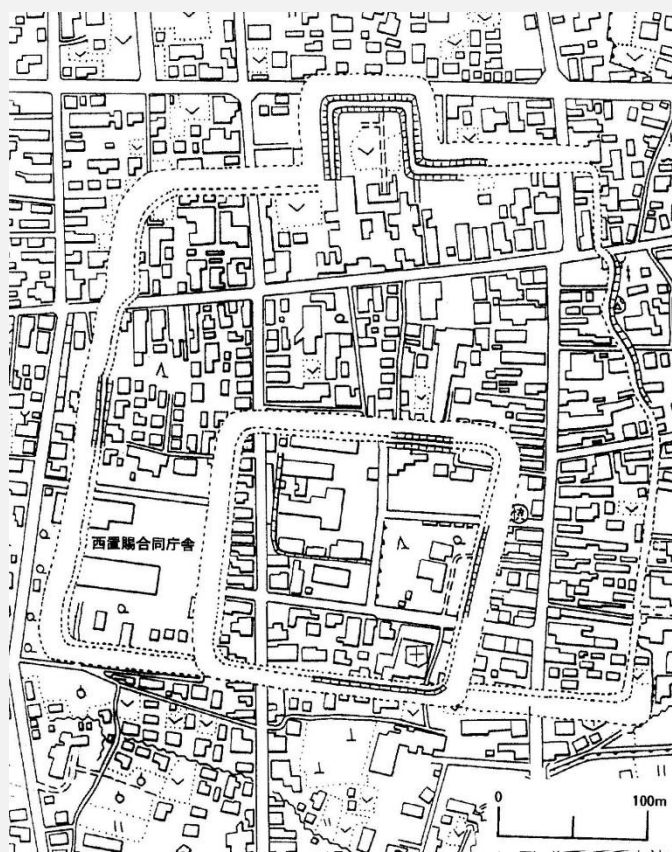
【菩提寺玉林寺】



## 9 中世の城館跡

長井市内には、戦国期の城館跡が54ヵ所確認されています。これらは、平地に築かれた館跡と、山頂部につくられた山城跡や砦跡に分けられ、日常は平地の館で生活し、戦が始まると山城や砦に移り住み、戦いに備えたといわれています。現代に伝わる土手状の高まりや堀跡、「館」という小字名は、平地に築かれた館跡の名残です。

また、山頂付近に構築された階段状の平場や、尾根を立ち切るような溝跡は、山城の施設の一部です。十日町、大町、高野町地区にまたがる宮村館は、旧郡役所跡を中心に約400m四方が館の範囲と推定



【宮村館の縄張図】



【宮村館土塁(北西部)】

され、つい最近まで、県道寺泉舟場線沿いに宮村館にともなう土塁と堀跡が残っていました。旧宮村は、この館跡を核として町並みが形成されてきました。

館町に所在する白山館は、白山神社と長遠寺を中心に、約100m四方が館の範囲と推定されています。白山神社の南西部から西側に伸びる高台は、当時の土塁跡で、西側には堀跡が残っていました。旧小出村は、白山館を核に門前町が形成され、町並みが形成されてきたといわれています。



【白山館の土塁(西側)】



【白山館の土塁(南西側)】



## 3 近世

## 1 近世の長井

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで上杉景勝は西軍へ味方し、最上義光を攻撃したために、戦後、徳川家康は、景勝より会津90万石を没収し、30万石に減封しました。これにより、景勝は米沢に入り、初代藩主となりました。このため、藩は財政上大変な危機に陥りました。ここで、直江兼続などの諸将は、まず領内諸制度の改革を行ないました。2代定勝は土地開拓と検地、キリシタンの禁制に力を注ぎました。

こうして、藩がようやく体制を整え、経済も安定を見ようとするとき、3代綱勝が急逝しました。綱勝はまだ若く、跡継ぎがなかったため、上杉家はお家断絶、藩のお取りつぶしの危機に直面しました。家臣たちは、綱勝の義父にあたる保科正之(第三代将軍徳川家光の弟)を頼りました。その力添えもあり、吉良家から養子を迎えるということで、15万石に削られただけで済みました。しかし、これによって米沢藩はますます困窮し、上杉鷹山の藩政改革が必要となるのです。



【上杉鷹山公】

齊憲は齊定の跡を継ぎ、天保10年(1839)から明治維新に至るまでの約30年間、幕末時代の藩主でした。その時代は、近代日本の脱皮を図るべく、どの藩も必死にもがいていたときでした。そうしたなかで、米沢藩は奥州諸藩の盟主の地位にありました。しかし、天下の体制はどうにもならず、徳川幕府は、慶応3年(1867)10月に大政奉還、12月に王政復古の号令となったので、藩主茂憲もついに、明治3年(1870)6月に版籍奉還を決意しました。ここで、米沢藩は初代景勝の慶長3年(1598)の米沢入部以来、13代茂憲まで272年の永きにわたる置賜支配に終止符をうちました。この間、長井は最上川舟運の川港として商業などの産業が起こり、藩内有数の在郷町として発展していきます。

西暦	16世紀	17世紀	18世紀
長井の出来事	一五二 伊達政宗、岩出山に移封代わって蒲生氏が治める 一五八 蒲生氏郷、長井郷の神社を合併して總宮大明神とすることを命ずる 一五九 朝日軍道がつくられる 一六〇 直江兼続、最上軍を攻撃して長谷堂まで進撃する。勸進代、寺泉、宮、伊佐沢の土豪等従軍 一六〇 慶長出羽合戦	一六二 草岡村の肝煎である青木新左衛門が減税を訴え処刑される 一六三 小出村、宮村に馬市が始まる 一六四 小出村に御蔵が建つ 一六五 漆ろうをつくる 一六九 小出村に御筒屋をつくり 一六九 西村久左衛門が最上川(黒滝)を開削 一六九 宮船場ができる	一七〇 馬頭観音堂大破につき再興 一七五 宝五の大飢饉、大洪水 一七五 西村久左衛門最上川舟屋敷、舟具召し上げ 一七六 米沢で富豪の家の打壊し 一七六 野川の締切堤防破れ、大洪水、死者あり 一七六 小出横沢四郎兵衛、川崎次郎右衛門ら六人を絹糸真綿問屋に指定する
全国の出来事	一五〇 豊臣秀吉 全国を統一 桃山文化	一六〇 関ヶ原の戦い 一六二 上杉景勝米沢三十万石に移封 一六三 徳川幕府の成立 一六四 米沢藩が三十万石から十五万石に減封 一六五 参勤交代始まる	一七六 享保の改革 一七六 徳川吉宗将軍となる 元禄文化
時代	安土桃山時代	江戸時代	

## 2 蒲生氏による統治

伊達氏の後に、置賜に入ってきたのが蒲生氏郷です。天正18年(1590)、豊臣秀吉の天下統一が成ると、奥州仕置があり、東北の藩の組み替えが行われます。氏郷は秀吉の有力な家臣で、その後の戦でたびたびの大功をたてていたのも、氏郷には、陸奥出羽の抑え役として、会津、仙道、置賜など73万石が与えられます。小田原参陣に遅れた伊達政宗は、会津、米沢などを没収され、岩出山地方に移されます。政宗の旧領伊達、信夫、長井の3郡は氏郷に加

増され、米沢3万8千石は氏郷の家臣郷安に与えられます。蒲生氏は、すぐに領内の検地を実施し、神社の合併などを進めました。

文禄4年(1595)、氏郷は京都で没し、嫡子秀行が13歳で家督を相続します。しかし、慶長2年(1597)に内紛が起き、秀行に統治能力がないとみた秀吉は、翌3年(1598)正月、秀行を宇都宮に移封します。こうして、蒲生氏の置賜領有はわずか8年間でした。その後、上杉時代が始まります。

## 3 直江兼続による統治

上杉謙信の後を継いだ上杉景勝は、慶長3年(1598)に越後より会津、米沢など120万石に加増されますが、このとき、長井(置賜郡)30万石は、秀吉の指名で直江兼続に与えられました。

兼続は、最上軍との戦に備えるため、すぐに置賜と庄内の連絡路として、長井草岡～葉山～朝日岳～以東岳～庄内を結ぶ軍用道路づくりにとりかかりました。この大工事には、長井の農民や修験者(山伏)、山人らを総動員して、短期間でつくりました。これは、地元の人たちが日ごろ使用している道を改修したものでした。上杉方の武将で、酒田城を守っていた志駄義秀は、多くの将兵を連れて雪

の朝日軍道を通して米沢に撤退しました。その道の完成後、上杉軍と最上軍が畑谷や長谷堂で激しい戦いを繰り広げますが、そのときには、長井から数百人が援軍としてかり出されました。その戦いの戦勝を祈願して總宮神社にお参りしたといわれています。

兼続は、農業の振興にも力を注ぎましたが、とくに、織物の材料となる「青苧」(麻織物の原料)を植えつけさせました。これは後に、長井地方の特産物になっていきます。直江兼続は、幼名を樋口与六といいました。その樋口家から直江家に婿入りしたのですが、兼続の実家の子孫は、越後から移って現在、飯豊町に住んでいます。

18世紀				19世紀										
一六七 上杉治憲(鷹山公)が継ぎ「大 俣約令」を始める	一七五 上杉治憲、下長井巡覧 凶作のため酒造禁止 幕府の役人叶久左衛門が指揮	一七三 平山締切堤防工事始まる	一七二 鮎貝羽黒山の杉で小鵜飼舟を つくる	一七六 小出村、横沢忠兵衛、越後よ り縮織を伝う 鮎貝羽黒山の杉で小鵜飼舟を つくる	一七五 天明の大凶作、花作の鈴木七 兵衛つつじ築山の工事、人 夫賃を払い窮民を救済する 總宮神社本殿再建	一八七 宮村新町より出火九七戸焼失	一八四 五十川牛沢十助、横縞の製法 始める	一八四 白兔の高橋門右衛門 本紬を織る	一八三 野川、白川の大洪水、 天保の大凶作、總宮の山車 当分禁止	一八五 最上川でつつが虫多発	一八三 小出荒館より出火、大半焼失	一八五 「東講商人鑑」に長井で 三十五軒加入	一八五 上杉齊憲洋式練兵を 今泉原で閲覧	一八七 米沢藩越後長岡で官軍と戦う
一七六 上杉重定財政難で藩土 返納を申しでる	一七五 竹俣当綱が漆・楮・桑 百万本を植樹する 計画を立て、指導する			一七六 寛政の改革		文化文政		一八四 天保の改革	一八五 日米和親条約の締結 ペリーが浦賀に来航	一八三 天保の改革	一八五 徳川家茂將軍となる	一八六 安政の大獄	一八六 桜田門外の変	一八六 徳川慶喜將軍となる
江戸時代														

江戸時代

## 4 上杉による統治

関ヶ原の戦いで西軍に味方した上杉景勝は、120万石から30万石に減封されました。120万石を支えていた6,000人を超える家臣団が、すべて会津から米沢に入城したので、市内は相当の混乱になりました。「義を重んじる謙信の精神」が上杉家には代々受け継がれ、この教えから、一人も放免しなかったといわれています。

しかし、家臣の知行(給与)は減らさざるを得なかったため、生活は困り、内職や村に出て開拓などをしました。長井でも勸進代新地などで、新田開発を行い、生計をたてていきます。

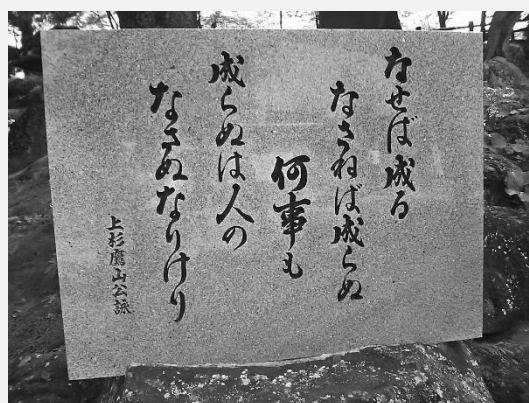
30万石に減封されて約60年経ち、藩の体制も安定しかけたとき、後継ぎ問題があり15万石に減らされてしまいました。

米沢藩は、江戸時代中期を過ぎると借金が膨らみ、どうにもならなくなってしまいました。借金は10万両で、藩の年収の4年分にもなりました。その原因は、人件費の増加、藩主のぜいたくな支出、幕府の工事の肩代わりなどです。ここで、上杉鷹山はこの借金を返済するために財政改革に乗り出します。上杉鷹山は第9代の上杉治憲はるのりです。当時、貧乏のどん底にあった藩財政に大胆なメスを入れて、立て直していった人物です。改革は「大倭令」から始まります。衣食住や娯楽などに、細かい決まりをつくり、質素倹約させていきました。鷹山の食事は一汁一菜、着物は木綿など、自ら範を示しています。

また、諸産業の振興ということで、米作の副業として漆うるし、桑くわ、楮こうぞの3種目を100万本ずつ植えさせて、増収しようとしていました。長井地方でも、この政策は隅々まで浸透していきます。置賜北部では、桑を植えて繭を取る養蚕業の方が活発になります。数年も経たないうちに、この地域の繭の生産は藩全体の70%を占めるまで進展していきました。

また、鷹山は長井に何回も訪れ、とくに成田の佐々木家には5泊もしたといわれています。

安永4年(1775)の「下長井巡覧」では、最上川や野川、白川の河川を視察し、川狩などして楽しんでいきます。野川の締切堤防、宮原、平山の開墾も見えています。鷹山の大改革で、なんとか借金を返済できたのは、数十年後になります。



鷹山は「なせば成る なさねば成らぬ何事も 成らぬは人の なさぬなりけり」という名言を残しています。總宮神社の本殿は、鷹山からいただいた木材で、天明2年(1782)に再建したものです。

江戸後期になると、貨幣経済の発展で世の中はめまぐるしく変化していきます。そのなかで、勢力を伸ばしてくるのが商業で、手広く商いをする商人が出てきます。長井商人は、値段の高値な生糸が一番有利な商品であることを知っていたので、近郷の農家に桑を植えることを要請し、生産した生糸は責任を持って買い上げるというシステムをつくりました。このやり方は順調に進展し、下長井は大養蚕地帯に発展しました。安政2年(1855)に出版された「東講商人鑑あづまこうあきんどかがみ」には、長井の商人が35軒も載っています。城下町米沢の37軒に匹敵するので、にぎやかな商業の町だったといえます。長井の最上川舟運で栄えた商人はあら町に多く、川崎八郎かわさきはちろう、右衛門、竹田五兵衛、川村利兵衛、斎藤弥助などが知られていますが、藩からは「お借り上げ」という名目で何回も金を借り上げられています。ちなみに、川崎家からは6,470両借り上げられました。

幕末の戊辰戦争で、米沢藩は仙台藩と共に奥羽越列藩同盟の盟主として、27歳の家老干坂高雅ちさかたかまさを総督にし、越後戦線を中心に戦いますが、敗北し、同盟は事実上終息しました。米沢藩に対する裁断は、藩主斉憲の隠居、茂憲の家督相続、4万石の召し上げという穏便なものでした。

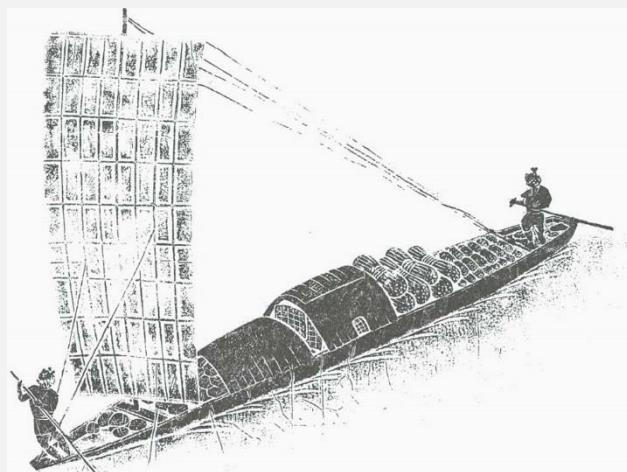
## 5 最上川の舟運文化

江戸時代、元禄7年(1694)に米沢藩の御用商人、西村久左衛門は、幕府と藩の許可を得て、左沢＝荒砥間の難所黒滝の岩を削りとり、最上川の舟を長井の宮まで通すことに成功しました。総工費は1万7千両といわれ、今のお金に換算すると、約20億円に相当するものでした。

米沢藩では左沢、荒砥、宮、糠野目に船場を設置しました。宮船場は、このときから米沢藩の表玄関となり、米、青苧の収穫が終わった時期には米沢領内の各地から宮へ荷車がにぎやかに往来しました。最上川をさかのぼる帰り舟には、京・大坂・能登の商品が積みれ、長井の町には商店、問屋が続々と建ち、その商品を運ぶ人足でにぎわいました。長井が藩内屈指の商業都市に成長したのは、この頃からです。

最上川通船による置賜地方の利益については、書籍に次のように書かれています。

「松川から最上川への通船は、米、青苧の上方への積み出しのため、黒滝の岩石を取り除いて始まったが、航路は陰悪で運送は困難であった。安政元年(1772)に阿武隈川に使われている、小鵜飼舟が急流の航行に適していることに目をつけ、舟大工を頼み、山口村羽黒山の杉を伐って小鵜飼舟をつくり、2万俵を酒田に輸送し、上米を売ったところ、その利益は大変なものであった。米沢は昔から米価が非常に安く、百姓も貧乏な生活に甘んじていたが、最上川舟運が開けてからは、米も下長井の商人たちが小鵜飼舟に積んで自由に売り出したの



【最上川舟運の主役を担っていた小鵜飼舟】

で、自然と米の値段も高くなり、百姓の利益はきわめて大きくなった」

黒滝の開削によって、長井の舟場からの荷は海を渡り遠く江戸・大坂まで届くようになり、舟による大量輸送が可能になりました。この輸送ルートに長井、荒砥が加わったことは、画期的な「交通革命」、「流通革命」でした。舟によって長井から運ばれたものは米、豆、青苧、真綿、生糸、蠟で、逆に長井に運ばれたものは塩、古着、綿、小間物、塩魚などでした。

川舟の運行中は危険だったので、船頭やその家族たちは、舟乗りの安全と舟の無事故を願って「ななだみみょうじん船玉大明神」を祀っていました。東山の麓には、その大明神の石碑が2基残っています。



【羽州川通絵図(山形県立博物館所蔵)】



## 4 近代・現代

## 1 近代・現代の長井

明治4年(1871)に米沢藩を米沢県と改め、その年の内に置賜県となりました。長井町は置賜郡から西置賜郡に入りましたが、長井町は西置賜郡の中心となり、町には役所、税務署、裁判所などが次々に建てられていきます。

明治11年(1878)、長井町に西置賜郡役所が設置されると、そこにつながるように、道路や橋が整備されていきます。明治22年(1889)に町村合併があり、江戸時代の村が合併して新しく、大きな町村になりました。長井町、長井村、西根村、平野村、豊田村、伊佐沢村が誕生しました。



【「堤塘記念 山形縣 長井町 41. 10. 17」の記念スタンプ入り絵葉書】

(旧西置賜郡役所)



【長井線開業時の様子】

大正3年(1914)には、鉄道が長井線として赤湯から長井まで開通します。平成26年(2014)は、その開通からちょうど100周年という記念すべき年となりました。一本の線路ができると、郡是製糸工場や長井中学校、長井高等女学校などができ、長井は目覚ましく変貌していきます。昭和に入り、大凶作などで困窮した一方、あやめ公園などで市民が楽しみ、繁盛する一面もありました。

昭和17年(1942)に東京芝浦電気長井工場が誘致されると、経済は伸びていきます。昭和29年(1954)には、昭和の町村合併があり、1町5ヵ村が合併して、人口37,429人の新しい長井市ができました。

西暦	19世紀	20世紀
長井の出来事	<p>一七 米沢藩を米沢県と改める</p> <p>一八 郵便取扱所開設</p> <p>一八 山形県に合併</p> <p>一八 西置賜郡役所落成</p> <p>一八 長井橋(木橋)開通</p> <p>一八 紺紬の伝習を受ける</p> <p>一八 町村制公布</p> <p>一八 白川橋開通</p> <p>一八 一町五ヵ村となる。 長井町、長井村、西根村、平野村、伊佐沢村、豊田村</p>	<p>一九 西置賜細織物同業組合設立</p> <p>一九 電話交換業務開始</p> <p>一九 乗合馬車が走る</p> <p>一九 長井駅が開業</p> <p>一九 長井町電気事業創設</p> <p>一九 長井大火</p> <p>一九 郡是製糸長井工場創業開始</p> <p>一九 未曾有の大凶作</p> <p>一九 東芝長井工場が誘致される</p>
全国の出来事	<p>一八 五箇条の御誓文</p> <p>一八 廃藩置県</p> <p>一八 明治維新</p> <p>一八 西南戦争</p> <p>一八 大日本帝国憲法発布</p>	<p>一九 日清戦争(一九)</p> <p>一九 日露戦争(一九)</p> <p>一九 第一次世界大戦参戦</p> <p>一九 関東大震災</p> <p>一九 満州事変</p> <p>一九 日中戦争(一九)</p> <p>一九 太平洋戦争(一九)</p> <p>一九 ポツダム宣言受諾・降伏</p>
時代	明治時代	大正時代 昭和時代
	軽工業の産業革命	重工業の産業革命

## 2 産業の移り変わり

江戸時代に宮村や小出村は定期市が開催され、宿屋もあって、在町として地域商業の拠点となりました。明治になってからも養蚕、生糸ブームは続き、製糸業を営む人が続出しました。経済が活気を帯び、西置賜の中心として発展の道を前進しました。

長井紬は、越後から技師を招いて始まっていますが、<sup>たけだ せいごろう</sup>竹田清五郎・<sup>さいとうしんきち</sup>斎藤新吉らはさらに優れた技術<sup>にしかたきちたろう</sup>を求めて、西方吉太郎を新潟から招いて、複雑な紬を織れるまでに発展させていきました。長井紬は、それ以来昭和40年頃まで、長井の重要な特産物でした。



【現代も続く長井紬の機織りの様子】



【川舟での稲の運搬の様子】

大正3年(1914)は長井の産業、文化に大きな変化をもたらした「長井の文明開化元年」といわれています。それは、町民が夢に描いていた長井線が開通したからです。このとき以来、長井線は西置賜の人や物資の輸送の大動脈となり、産業の振興発展に偉大な力を発揮しました。

大正9年(1920)には郡是製糸工場、昭和17年(1942)には東京芝浦電気の工場の企業誘致があり、長井の産業は一段と発展していきます。

昭和40年代になると、技術革新が進む中で、長井の工業は、マルコン電子、ハイマン電子、郡是、協同薬品などの大きな企業が発展していきますが、産業構造の変化などにより、苦戦を強いられています。

20世紀				21世紀			
一九四七	協同薬品工場 創業開始	一九五四	一町五カ村が合併し、 長井市誕生	一九五二	日米安全保障条約	一九六二	新白川橋完成 白川橋流失
		一九五四	管野ダム完成	一九六四	東京オリンピック	一九六七	羽越水害
		一九六一	木地山ダム完成	一九六八	万国博覧会(大阪)	一九七二	べにばな国体、卓球競技 少年の部開催
		一九六二	花菖蒲「長井古種」発見	一九七八	長野オリンピック 阪神・淡路大震災	二〇〇六	ロボワン全国大会開催
		一九六四	東京オリンピック	二〇〇八	世界金融危機	二〇一一	長井ダム竣工
		一九六八	万国博覧会(大阪)	二〇一一	東日本大震災		
		一九七二	べにばな国体、卓球競技 少年の部開催				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成				
		一九七二	白川橋流失				
		一九七二	羽越水害				
		一九七二	新白川橋完成		</		

### 3 昭和と平成

昭和初期の農村不況はひどいもので、収入の半分を地主に小作料として取られる地主制度、昭和9年（1934）を前後とする東北大冷害もあり、生活に困り始めた農家では、娘を金になる工場などに売るという人身売買が話題となりました。

ようやく世の中が落ち着いてきた昭和29年（1954）、「昭和の町村合併」が行われ、長井町（現在の中央地区）、長井村（現在の致芳地区）、西根村、平野村、豊田村、伊佐沢村の1町5ヵ村が合併して長井市が誕生しました。長井市は最上川、野川、白川に囲まれ、農業と商業、工業が一体となった市になりました。

平成26年（2014）は市制施行60周年を迎えて新たなステージの幕がひらき、さまざまな記念行事を展開しました。



【昭和10年 長井駅前の歓迎門】



【昭和40年代初期 長井市駅前通勤通学者の様子】



【平成23年 長井ダム竣工式の様子】

沈滞していた長井に活気をもたらしたのは、長井でのダム工事でした。明治以来の課題であった洪水防止、用水確保、水力発電の総合ダムの建設工事は市民の暮らしに大きく貢献しました。管野ダムが昭和29年（1954）、木地山ダムが昭和36年（1961）、さらに平成23年（2011）には東北でも有数の重力式コンクリートダムの長井ダムが完成しました。

昭和の終わりから平成にかけて、「長井市レインボープラン」が話し合われ、実施されました。このプランは、「地域資源循環型の社会のシステムの構築化を目指すもの」ですが、具体的には生ごみの堆肥化と、それを利用した農作物の地域流通を図るものであり、「台所と農業をつなぐ長井計画」ともいわれています。この計画と実践は市民、行政、農家が一体となり取り組んだこともあり全国でも有名になり、長井には多数の見学者が訪れました。

「環境にやさしく」という長井の人々の願いは、このプランだけでなく、環境問題はダム、発電などにも生かされ注目を浴びています。

平成26年度からは、長井市第5次総合計画がスタートしました。この計画では、「みんなで創るしあわせに暮らせるまち長井～人にぎわい心かよう水のふるさと～」という将来像です。

「みんなで創る」は、市民と行政による協働のまちづくりに、引き続き取り組んでいる姿を表わしています。市民の一人ひとりが努力して、幸せに暮らせるまちにしていきたいものです。

## 5 寺院・神社

## 寺院

1

金剛山 胎蔵院 <sup>へんじょうじ</sup> 遍照寺

長井市横町14-8

- |            |            |
|------------|------------|
| ■宗旨 真言宗豊山派 | ■中興開山 宥日上人 |
| ■本尊 大日如来   | ■本寺 奈良県長谷寺 |
| ■開基 万条清    |            |

古来、奥の高野と称され、明治維新前は末寺37カ寺を有する格式高い寺でした。

3,000坪を越す大境内には、大門、大本堂、庫裡、鐘楼、地藏堂が整然と建っています。

延享2年(1745)の宝篋印塔と宥日上人による、手植えの大銀杏は名刹のシンボルです。



2

向陽山 <sup>ほうさんじ</sup> 法讃寺

長井市四ツ谷 5-8

- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| ■宗旨 浄土真宗  | ■開基 浄西法師(慶長3年頃) |
| ■本尊 阿弥陀如来 | ■本寺 京都市東本願寺     |

本町にありましたが、嘉永5年(1852)に類焼し、安政3年(1856)に現在地に再建されました。鐘楼堂を建設したのが9代法潤です。12代豊忠は私立置賜図書館を設立し、一般に貸し出しをしていました。

戦時中、強制的に供出させられた梵鐘は、信徒により復活し、朝晩2回時を告げています。



3

館照山 <sup>ぎょくりんじ</sup> 玉林寺

長井市上伊佐沢2916

- |           |                |
|-----------|----------------|
| ■宗旨 曹洞宗   | ■創立 永正元年(1504) |
| ■本尊 釈迦牟尼仏 | ■本寺 神奈川県海蔵寺    |

伊達政宗の家臣、桑島将監が、妻お玉と息子の新太郎の供養のため建立し、お玉の戒名「玉林妙江大姉」から玉林寺としました。





## 4 妙理山 長遠寺

長井市館町北 10-49-12

- 宗旨 真言宗豊山派 ■開基 西光院殿大須賀長任
- 本尊 大日如来 ■本寺 奈良県長谷寺

史料がなく詳細は不明ですが、暦仁元年（1238）大須賀長光がここに館を作ったとき、加賀白山の分神と寺を建立したという伝承が残っています。寺は次第に荒廃しましたが、伊達時代に子孫の長任が義昌と名乗って出家し、中興しました。別堂の黒仁王尊には、大草鞋が奉納されており、近年、築山などに十三重石塔と十六羅漢が安置されました。



## 5 瑠璃光山 薬師寺

長井市あら町 2-1

- 宗旨 真言宗豊山派 ■創立 鎌倉期以前と推測
- 本尊 大日如来・薬師寺如来 ■本寺 奈良県長谷寺

創立以来、何度か火災に遭い、寺史は不明ですが、安置する仏像や書籍で推測されています。十指に余る宝物や石碑など文化財が多くあり、薬師堂には本尊と日光、月光など諸仏が祀られ、最近では、位牌堂、本堂、薬師堂玄関の桁に、荘厳な彫刻の四季の絵柄や、長井四季十二飛天曼荼羅の襖絵が備えられました。



## 6 恵日山 宥日寺 常楽院

長井市栄町10-38

- 宗旨 真言宗豊山派 ■開基 宥日上人
- 本尊 不動明王 ■本寺 奈良県長谷寺

室町時代の高僧、宥日上人の閑居寺として七堂伽藍が整えられていました。

大正6年（1917）の長井大火により類焼しましたが、同10年（1921）に宥日堂宇を再建、昭和35年に現在の寺閣になりました。あかぎ祭りや火伏せの行事が有名です。

## 7 三峯山 洞松寺

長井市草岡1367

- 宗旨 曹洞宗 ■創立 応仁の頃（1470～）
- 本尊 釈迦牟尼仏 ■本寺 南陽市盛興院

瑞龍院五哲の一人、月窓正印が、南陽市にある盛興院の次に洞松寺を建立しました。

火災により諸記録は焼失しています。延享3年（1746）に再建し、高世八兵衛、高世次兵衛がこの地に建てました。

## 8 桜本山 正寿院

長井市五十川2253

- 宗旨 真言宗豊山派 ■開基 宥日上人
- 本尊 大日如来 ■本寺 奈良県長谷寺

正徳4年（1714）、東五十川の生僧寺を現在地に移建したことをきっかけに開かれました。

その歴史は、応永年間（1394～）にさかのぼるといわれます。

## 9 岩切不動尊

長井市下伊佐沢

- 創建 永正元年（1504） ■別当 龍雲寺
- 本尊 木像不動尊

領主の伊達輝宗が寄進したという伝承が残っている御堂は、寛政6年、文政12年と明治になってから再建されました。昔、近くの最上川は川幅が狭く、毎年氾濫していました。平安時代の初め、円仁（慈覚大師）と地区民が川底を削る工事を行った時に、お不動様が現れ、固い岩盤を大きな足で壊し、工事を助けたと伝わっています。

## 10 西光山 摂取院

長井市大町 1-13

- |            |            |
|------------|------------|
| ■宗旨 真言宗豊山派 | ■開基 行道上人   |
| ■本尊 不動明王   | ■本寺 奈良県長谷寺 |

創立は寛仁元年(1017)、法相宗に所属後、浄土宗になり、宥日上人により真言宗となりました。天保14年(1843)に荒廃の寺を再建し、寺子屋修身館が現在の小桜幼稚園に受け継がれています。昭和35年(1960)に寺閣を一新しました。

## 11 正徳山 福蔵院

長井市成田 1524

- |            |            |
|------------|------------|
| ■宗旨 真言宗豊山派 | ■創立 永享元年   |
| ■本尊 大日如来   | ■本寺 奈良県長谷寺 |

二度の火災により寺伝は不詳ですが、観音堂は神亀2年(725)の創建と伝えられています金色堂に馬鳴菩薩が祀られています。

米沢藩のお抱え絵師、小田切寒松軒が作った東庭と8枚の見事な襖絵が飾られています。

## 神 社

## 1 總宮神社

長井市横町 14-24

言い伝えによると、白鳥大明神、宮の明神と称しました。文禄2年(1593)、蒲生氏郷が下長井郷の神仏を合祀し、總宮神社としました。

明治13年に県社列格になり、本殿は天明2年(1782)に竣工されました。現在の参道は、昭和8年に皇太子殿下(現 明仁上皇陛下)御生誕を記念して造られました。境内には末社15社が祀られています。



## 2 小出白山神社

長井市館町北10-21

史料がなく詳細は不明ですが、暦仁元年(1238)に長井時広の家臣大須賀長光が、この地に館を構え、加賀白山神社の分霊を勧請したという伝承が残っています。

さらに、天正年中(1573~)に伊達輝宗の家臣桑島将監、小松蔵人などが再興しています。慶安4年(1651)に改築したのが現社殿です。明和4年(1767)に仁王門を建立しましたが、大正7年(1918)に長遠寺に移転しました。



## 3 葉山神社

長井市白兔2258

置賜葉山の白兔から登る道を「葉山参道」と呼び、山頂には奥宮月山宮と羽黒宮があります。葉山神社は、この2社の里宮となっています。

田の神様として信仰されており、大宮子易神社に次ぐ社格で、21年毎の式年改築をされています。



## 4 白山神社(十日町)

長井市十日町 1-8-12

小桜城の鬼門に当たるこの地に建てたとの記録があります。宮村館の外郭、館堀の北東角に当たります。

本殿は一間4面、拝殿は二間5尺、白山寺は四間に八間の大伽藍でした。寺は明治6年(1873)に遍照寺に併合されました。

## 5 皇大神社

長井市神明町 3-8

元治元年(1864)の火災により記録が焼失し、創立は不詳。文政13年(1830)の銘の常夜灯があります。

慶応2年(1866)、四釜清五郎が伊勢参宮の際に、分霊を勧請し現在地に再建しました。

昭和34年(1959)に東北地方では初めて伊勢神宮の神殿一字を拝受して、当社の本殿として移築し、翌年拝殿を改築しました。

## 6 五所神社

長井市寺泉2303

1090年、当麻秀則が源義家の命により、朝日岳、祝瓶岳、小朝日、月ヶ峰、三淵の5カ所の尊霊を遷座合祀しました。

さらに、大正2年(1913)に山、三淵、八幡、大沢、熊野の五神社を合併し、地名の五祭所の由来になりました。

## 7 津島神社(森)

長井市森山田4-1

天和2年(1682)に創建されました。小出村安松寺の僧、宥昌ゆうしょうが疱瘡の治療と毒蛇退治の功德により建てられました。

暴風で破損した拝殿を昭和14年(1939)、松木左七郎の寄進で再建されました。牛頭天王ごずてんのうが祭神であるため「お天王様」とも呼ばれています。

## 8 伊佐沢神社

長井市上伊佐沢2986-2

大同年間(806～)に創建されたと伝わっています。

上伊佐沢八幡前に八幡神社が祀られていましたが、明治49年(1916)に大石神社、天羽神社、山祇神社、白山神社を合祀、さらに、大正8年(1919)に稲荷神社を合祀し、現在地に至っています。

昭和60年に氏子の寄付により再建しています。

## 9 若宮八幡神社

長井市成田1184

天喜年中(1053～)に源頼義が造ったといわれています。鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請し、社を建て、若宮八幡とよばれました。

明治42年(1909)に三嶋、飯綱、羽黒を合祀しました。例祭には演芸、芝居、カラオケ大会でにぎわい、獅子舞と神輿が地区内を巡ります。

## 10 津嶋神社(草岡)

長井市草岡 1246

文化年中(1804～)に別当の歓喜院かんきいんが火災に遭ったため、記録が消失していますが、正平13年(1358)の創建と伝えられています。

文化6年(1810)に再建され、社殿に木瓜もっこうの紋が刻まれ神紋としています。明治23年(1890)に再建され、昭和48年(1973)に大規模改修をしました。

## 11 豊里神社

長井市時庭375

正平3年(1348)の創建と伝えられています。宝永5年(1708)に社殿を再建しています。寛政9年(1797)に建立とある本殿は荘厳美麗です。

大正元年(1912)に八幡・稲荷の2社を、同9年(1920)に諏訪神社を合祀し、豊里神社と改称しました。

祭日には、黒獅子舞が六角の神輿とともに地区を巡ります。

## 12 蘊安神社

長井市五十川896

社記によれば、元慶2年(878)に鎮守府將軍小野春風<sup>おののはるかぜ</sup>が出羽に出兵しました。藤原蘊安は軍役の強制をせず、戦闘をさせて元慶の乱を治めました。領民はその善政<sup>ほこら</sup>を仰ぎ、祠を造り奉賛しました。明治42年(1909)に熊野神社を合祀しました。

昭和24年、上杉家宝庫より蘊安公木像を譲り受け、御神体として祀っています。征服者の將軍を祀った、数少ない神社です。



## 13 八雲神社

長井市九野本463-1

大治3年(1128)に京都祇園八坂神社から分霊を勧請したといわれています。御神体は宥日上人作と伝えられ、木彫の牛頭天王です。

地域では、初もののキュウリを神社に供えてから自宅で食する風習があります。

## 14 稲荷神社(今泉)

長井市今泉字本地-1013-3

古くは、正一位稲荷大明神と称していました。明治34年(1901)の今泉大火で全焼し、その後再建され、白山神社と統合しました。

平成2年に新たに申請し、神社庁から認可されました。

## 15 稲荷神社(九野本)

長井市九野本2946

大同2年(807)に伏見稲荷から分霊を勧請したといわれています。天保12年(1841)に再建しましたが、明治32年(1899)に類焼し、45年(1912)に再建しています。

昭和42年に拝殿などを改築し、皇大神社を合祀しました。境内に梅沢山神社、琴平神社の2社が祀られています。

## 16 羽黒神社(泉)

長井市泉381

建武2年(1335)の創建と伝えられています。昭和35年までは黒獅子が最上川を渡り、勇壮華麗でした。昭和36年に雪害により現在の場所に移転し、昭和52年に改築されました。

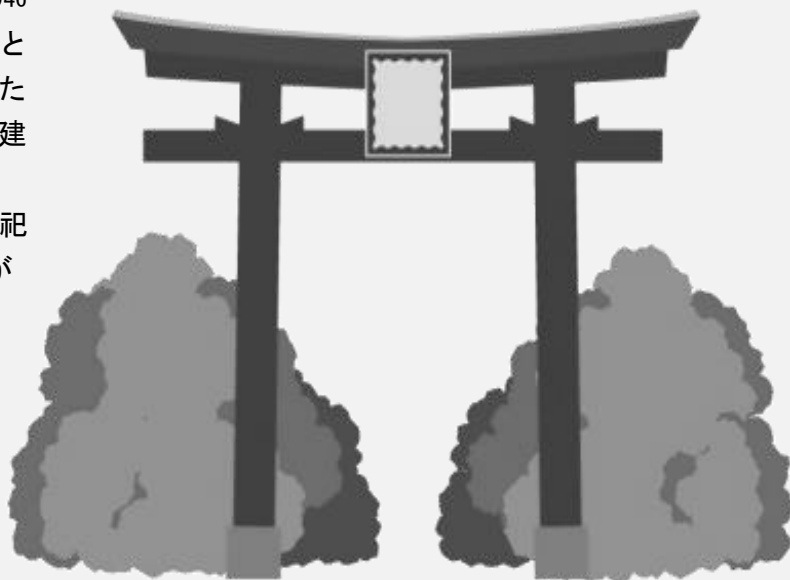
御神体の「こも包み観音像」は、「みのわ」から拾い上げて祀っています。

## 17 熊野神社(平山)

長井市平山2766-8

大治4年(1129)に伊勢熊野大権現より勧請したといわれています。奥の宮が熊野山(669.5m)の山腹にあり、寛政3年(1791)に社殿が再建されています。

昭和9年に羽黒神社を合祀し、11年には菅原、諏訪、藤白、白山、稲荷の5社を合祀し、平山地区の鎮守、産土神として信仰されています。





# 置賜三十三観音

## ・観音信仰について

観音菩薩<sup>ぼんざつ</sup>は、平安時代末から民間から一番信仰された仏で、世に光を与える音の持ち主であり、悩める衆生<sup>しゅうじやう</sup>がその名を唱えるとすぐ救済されるとされています。観音が衆生を救うため、三十三に身を変えるという仏の教えから、観音菩薩を祀る三十三箇所の霊場に、札を納めて回る巡礼が始まりました。

県内には最上、庄内と置賜にそれぞれ三十三観音があり、その三つをあわせて出羽百観音といわれています。置賜三十三観音は上杉家の重臣であった直江兼統の奥方、お船<sup>せん</sup>の方が霊場を定めたといえられ、その霊場は素朴でありながらも厳かで、今でも地域の人々の手により大切に守られています。

### 1 九野本観音 観音寺

置賜第五番札所	
■宗派 曹洞宗	
■創建 寛文8年(1668) ■再建 嘉永7年(1854)	
■本尊 十一面観世音菩薩	
ご詠歌	九野本を 救う誓いの 深ければ 頼みをかけて 安楽の世に

観音堂は、寛文8年(1668)に梅津萬右衛門<sup>うめつまんえもん</sup>が造営し、嘉永7年(1854)に観音寺とともに再建されました。



長井市九野本2047

寺は伊達持宗の時代、長禄元年(1457)に九野本<sup>くによほん</sup>金城の豪族梅津将監が創建しました。観音寺は合併したと思われる。

### 2 時庭観音 正法寺

置賜第六番札所	
■宗派 曹洞宗	
■創建 和文3年(1354) ■再建 明和5年(1768)	
■本尊 聖観世音菩薩	
ご詠歌	庭をたて 土をたたえて 時庭の 前の古木も 浄土なるらん

開基は、文和3年(1354)に能登<sup>のんぎやう</sup>の総持寺の行脚僧<sup>ぎやうきゃくそう</sup>の道叟<sup>どうそう</sup>愛禅師<sup>あいぜんし</sup>が悟りを開き、この地に寺と観音堂を建てたと伝えられています。その昔、豪族の馬乗



長井市時庭1428

の練習場に建てられたといわれ、毎年7月17日に観音まつりが開かれます。梅花講によりご詠歌が唱和されています。

### 3 宮の観音 普門坊

置賜第十番札所	
■宗派 真言宗	
■創建 天保年間(1830~43)に再建	
■本尊 馬頭観世音菩薩	
ご詠歌	夜もすがら 月をみあげて おがむなり 沖の川瀬に たつは白波

25坪の観音堂は古式豊かな建築様式を誇っています。鎌倉時代から馬の産地として、この地方の信



長井市横町14

仰と繁栄の象徴でもありました。卯の花姫が、乗馬の上達を願って夢枕に立った観音を、運慶<sup>うんけい</sup>に彫らせた伝承があります。

### 4 芦沢観音 雲洞庵

置賜第十七番札所	
■宗派 曹洞宗	
■創建500年以上前 ■再建 享保8年(1723)	
■本尊 十一面観世音菩薩	
ご詠歌	誓いあれ さかゆる世々の ためしには 難波のことも よしや芦沢

長い石段と両側にそびえる千年松は霊域を感じさせます。石段は、芦沢氏子と講中が正徳2年(1712)に築きました。その昔、宮中儀式を担当した



長井市芦沢1689

旧家の色摩家の屋敷鎮守を移築したのが始まりといわれています。享保8年(1723)に鮮やかな朱塗りの観音堂が再建されました。

## 5 いかがわ 五十川観音 しょうじゅいん 正寿院

置賜第三十一番札所	
■宗派 真言宗	
■創建 大同元年(806) ■再建 宝暦9年(1759)	
■本尊 千手観世音菩薩	
ご詠歌	いかがわと 思うは人の 迷いなり 千手の誓い いつも絶えせぬ

宥日上人の母親が、上人が産まれる前にここで「子供が授かるように」と願いを掛けたという説話から推測すると、応永2年(1395)以前からあったと



長井市東五十川生僧

考えられます。現在のお堂は、宝暦9年(1759)に再建されました。お堂正面の唐獅子などは装飾性が高く、壮麗です。

## 6 森の観音 へんじょうじ 遍照寺

置賜第三十二番札所	
■宗派 真言宗 ■再建 享保7年(1722)	
■本尊 千手観世音菩薩	
ご詠歌	ありがたや 教えにまかす 此の身こそ 念彼観音の ちかいなるらん

近くに塔の入りという山中に平らな土地があり、千手観音跡とよばれています。かつての別当は真光寺で、明治初年廃寺になり、現在遍照寺が別当



長井市森地内

となっています。明治35年(1902)に村中の寄進で御前坂を造りました。

## 6 神事・伝統芸能

## ながいの黒獅子「おしっさま」

長井の守り神である黒獅子は、「おしっさま」とよばれ、地域の人に親しまれています。

漆黒の面に目玉が丸く飛出し、眉は目玉の後方まで下がり、前後に面長で、顔を覆う真っ白なたてがみと鼻毛が特徴です。また、その面持ちは「蛇頭」とよばれ、この地域固有のものです。黒獅子舞は、獅子頭に波頭を表した大幕をつけ、その中に大勢の舞手が入り、境内やまちの中を練り歩きます。幕の下から沢山の足が見えることから「百足獅子」ともよばれています。

その舞の特徴は、頭を上下させず、滑らかで蛇が水面を進む様を模した動きとされています。厄除け、身体堅固、五穀豊穡、安産や子供の成長を祈願する神事として市内の神社に伝わっており、各神社の例祭日には、警護（相撲または角力）に先導された黒獅子が各地区の氏子一軒一軒を練り歩き、祓い清めます。



## 黒獅子舞の歴史



源頼義が前九年の合戦(1051~1062)の戦勝祝いとあわせ、總宮神社の社殿を再建した時、兵士たちに獅子舞をさせたのが、長井の獅子舞の始まりといわれています。この獅子舞は、野川上流の三淵に身を投じた卯の花姫が龍神となり、神社の例祭に招かれ、野川の流れを下る姿を表したものです。

## ながいの獅子踊り

### 1 川井獅子踊

市指定無形文化財（芸能の部）

江戸時代元禄年間のこと、老いたキツネがたわに実った稲穂をくわえてやってきたので、村では豊作の前ぶれとしてこれを歓迎し、八幡神社にお礼を兼ねて越後の豊年踊りを習い、奉納したのが始まりと言われています。

踊りは、<sup>まとい</sup>纏持ち、警護、獅子、踊り子（女装）、伴奏（笛と歌）、火の輪（世話役）など少なくとも15名の演者で構成されています。

### 2 平山獅子踊

市指定無形文化財（芸能の部）

江戸時代慶長年間に、直江兼統の家来<sup>あおきたんば</sup>青木丹波守<sup>のかみ</sup>がこの地に移住した際、人々の生活に潤いを持たせようと越後の獅子舞を広めたのが始まりと言われています。保存会が結成されて以来、演目の伝承はもちろん、後継者の育成に取り組むなど伝統文化の継承と発展に情熱を注いでいます。



まとい、獅子、笛、踊、火の輪、面すりなどの役割があり、三十数名で構成された豊年踊りです。

### 3 五十川獅子踊

市指定無形文化財（芸能の部）

文政10年（1827）に蘊安神社が再建された際、川井獅子踊を習って奉納したのが始まりと言われています。<sup>おじし</sup>牡獅子、<sup>めしし</sup>牝獅子、<sup>ともじし</sup>友獅子が牡丹の花とたわむれて喜び踊る様子が表現されています。また、和紙で作られたカラクリ仕様の火の



輪に飛び込む場面は、迫力があり、見どころとなっています。

### 4 勸進代獅子踊

市指定無形文化財（芸能の部）

天保3年（1832）、村が凶作で飢饉に見舞われた際、その苦しみをやわらげ、豊作を祈願するために現在の總宮神社に奉納されたのが始まりと言われています。

この獅子踊は五十川の獅子踊を習ったといわれ、牡獅子、牝獅子、友獅子を中心に多数の女装の踊り手が演じます。一時は途絶えたものの昭和48年に復活し、保存会を中心に伝承されています。

## 伊佐沢念仏踊

県指定無形民俗文化財

室町時代永禄年間に、上伊佐沢の玉林寺の落慶法要に奉納したのが始まりと言われ、そもそもは豊作を祈願した踊だったものが、年月を経るごとに美しさと複雑さが加わり、盛大になったと伝わっています。50名近くの踊り手が十数種類の役を演じ、曲や鳴り物に合わせてそれぞれの振りで踊り、かつては伊佐沢の久保ザクラの下で行われました。

地区の子どもたちとともに地域一丸となって伝承されており、多くの人たちに愛され親しまれています。





## 7 歴史的建造物

## 国登録有形文化財

1 なべやほんてん 鍋屋本店 国登録有形文化財

店構えは、明治30年代に建て替えられたものの、創業が江戸後期頃の金物屋です。店は茅葺、つし造り（二階部分が低いつくり）で東が切妻屋根、西が寄棟、平入り（軒先）には下屋がついていました。店内の当初の畳部分は撤去され、すべて土間となっています。店に続く主屋も、明治33年（1900）頃の建築で、木造平屋切妻造りで茅葺、煙出しがついています。

店、主屋ともに創建時の状態を維持しており、たいへん貴重な建物です。



## 2 長沼合名会社 国登録有形文化財

以前は呉服商でしたが、大正5年（1916）に醸造業を創業。広大な敷地に、店舗兼主屋、仕込み蔵、前蔵、内蔵、新蔵、中蔵の6棟の有形文化財が点在しています。

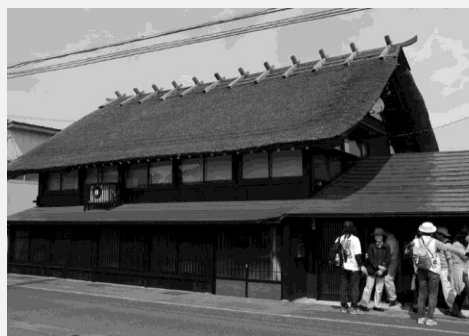
主屋は木造平屋建て切妻鉄板葺（以前は茅葺）平入りで、天保9年（1838）の創建です。土間から茶の間、二の間、上段と続く江戸期の商家造りです。仕込み蔵は平屋建て、大正期の建築です。前蔵は、3棟続きで明治4年（1871）建築。ほかの3棟は、木造二階建て土蔵造りです。



## 3 齋藤家住宅 国登録有形文化財

あら町通りの南端で「四ツ家」があったことから、町名が四ツ谷になったということですが、大正10年（1921）、道路の延伸とともに齋藤家も現在地に移転しました。その主屋は、茅葺木造二階建て鉄砲梁によるつし造り（二階部分が低い造り）で、その間取りや骨組みなどから、江戸後期の創建といわれています。

付属の蔵は、置屋根二階建てで明治期の創建です。往時の街道沿いの町屋の風情を伝える貴重な建物です。



## 4 旧長井小学校第一校舎

国登録有形文化財

大正3年（1914）の長井線開通時に、現在の市役所前十字路付近にあった校舎を、昭和8年に道路延長のため現在地に新築しました。木造二階建て瓦葺、舟底天井、内部正面の折り返し板階段の堂々とした木造校舎です。

平成31年4月に交流と学びの拠点として整備され、リニューアルオープンしました。





## 5 丸や芳賀醤油店 国登録有形文化財

文政4年(1821)創業。当時の店構えはありませんが、穀蔵と火入れ蔵の2棟が有形文化財です。そのほかに、もろみ蔵、家財蔵があります。穀蔵は、間口2間半、桁行6間、木造二階建て鉄板葺置屋根の土蔵造りです。漆喰壁で腰は鎧板囲い、蔵内に、墨書で「明治22年(1889)造」とあります。火入れ蔵は間口3間、桁行5間、木造平屋建て鉄板葺置屋根の土蔵造りです。漆喰壁で腰は鎧板囲いで、こちらも明治期の建物といわれています。

南に面して4つの窓があるのが特徴で、味噌醤油の製造に適した温度、湿度の調整機能を持つ日本独自の貴重な建物です。



## 6 山一醤油店 国登録有形文化財

醤油所の創業は弘化3年(1845)で、現在の店は大正9年(1920)頃に再建されたものです。店に続き、若衆の間、醤油蔵、仕込み場、味噌蔵と約100mの長さがあります。

店は、木造二階建て鉄板葺、切妻平入りで下屋付、二階の前面格子、一階の格子付ガラス戸が建物を一体的に見せています。店内は、再建当時のまま、土間と板の間です。醤油蔵は木造平屋建て鉄板葺、間口5間、桁行12間の洋風トラス小屋の蔵造りで、長井では希少な建物です。木造平屋の仕込み場内には、江戸時代からの水路があり、ここで桶を洗った姿をそのままとどめています。



## 7 山形鉄道フラワー長井線 羽前成田駅本屋 国登録有形文化財

羽前成田駅は、国鉄長井線が長井駅から鮎貝駅まで延伸開通した大正11年(1922年)に開業しました。洒落た半切妻のポーチが乗降客を迎える洋風基調の駅舎です。構内カウンターを支える持ち送りには幾何学的な意匠、荷物受付窓口の腰板は一枚板の掘り込み、屋根の破風板端部にも装飾的な彫りが施され、大正期からの鉄道の歴史を伝える貴重な建築といわれています。

平成27年(2015年)8月4日、駅本屋が西大塚駅と共に国登録有形文化財に登録されました。地元の「羽前成田駅前おらだの会」によって年間を通した維持活動が行われています。



## 8 旧丸中横仲商店蔵群 国登録有形文化財

最上川舟運で栄えた商家が軒を連ねるあら町に所在する土蔵群。桁行約12mの大型の砂糖蔵、土蔵・質蔵、粉蔵・江戸蔵の5つの蔵が敷地内に3列に並んでいます。土蔵と質蔵は、漆喰塗の外壁の要所に黒漆喰を用いて装飾的に仕上げており、江戸蔵は東面に縦長窓を設け掛子塗の土戸をつけるなど、当時の高い左官技術を今に伝えています。



写真提供:長井市教育委員会

## 最上川舟運文化

## 1 旧丸大扇屋 県指定有形文化財

十日町通りにある、江戸時代から続く最上川舟運で栄えた商家「丸大扇屋」の家屋敷です。主屋の旧長沼忠兵衛宅を中心に、店、店蔵、内蔵、座敷蔵、新座敷の6棟が、平成15年に県の指定を受けました。

主屋の合掌小屋と茅屋根、店の落とし雨戸や箱階段、商品をしまう店蔵、生活物品をしまう内蔵、お客様をもてなす座敷蔵などが、通路や庭と一体的に造られ、明治期の商家の姿を後世に伝える貴重な建物です。



## 2 やませ蔵

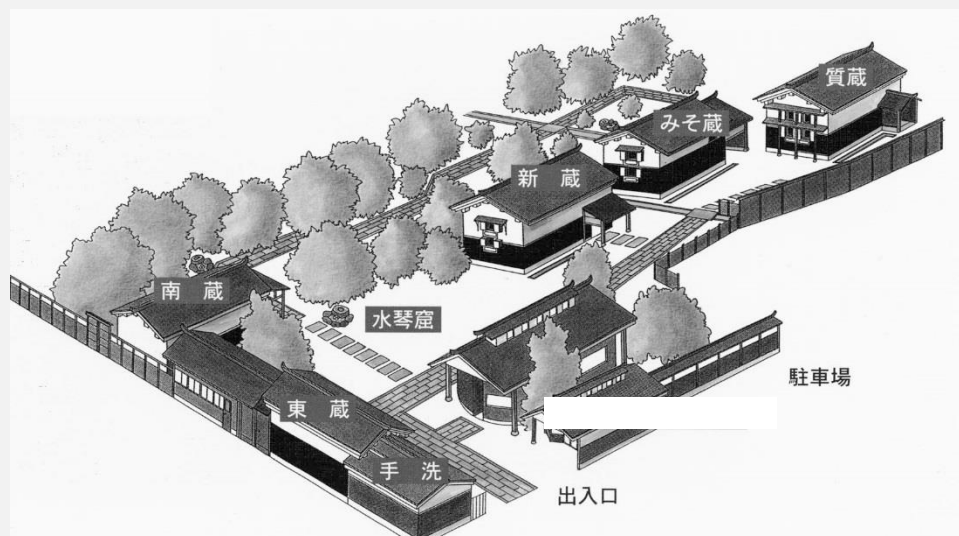
竹田清五郎は、宮船場ができた元禄の頃、山形から現在のあら町に移り、「最上屋」として、主に太物ふともの(綿の既製品＝足袋や風合羽)、古手(古着＝普段着や作業着)を中心にした商売を始めました。文化文政以後の長井では、指折りの豪商になっています。

慶応元年(1865)生まれの清五郎(当主が代々襲名)は、長井紬の改良に努め、その最盛期をつくったといわれています。明治36年(1903)の竹田紬工場の紬生産は、町全体の半分を超す勢いだったといえます。

当時の店構えは、北から店蔵、店屋、小間屋門と続いています。昭和5年に造られた蔵座敷は、長井では一番立派に造られたものだそうです。



やませ蔵建物配置図



## 3 岩城屋

正面入り口の小間屋門をはさんで、北側に店、南側に店蔵が並んでいる、長井の店屋の典型的な建物です。店蔵は江戸時代からのものですが、店と主屋は、大正6年(1917)の大火の後も、まったく同じ形に新築されています。入口の格子戸と小間屋門の「のれん」、店の格子窓とその上の「キリヨケ」とよばれる丸く反った小屋根、雨風から漆喰のアオリ戸や窓を守るために店蔵の窓につけた出窓風の「ワサヤ」など、雪国の風土と長井が商業都市として栄えた頃の面影を残しています。屋敷の奥には



「団雪庵」だんせつあんと称される銅板葺寄棟造りの客間があります。

## 4 青苧蔵門

宮村青苧蔵は、宮村館(現在の小桜館のある所)の東にあったもので、現在残っているのは青苧蔵に付随する門だけです。青苧は、漆とともに米沢藩の最大の産物で「からむし」ともよばれ、専売作物でした。青苧蔵が建てられたのは、寛文3年(1663)で、西置賜の青苧は集荷された後、米沢の青苧蔵に運ばれ、そこから奈良(関西)方面に晒さらしの原料として送られました。長井では、中伊佐沢や白兔が主産



地で、質も良く、生産量も多かったといわれています。この青苧蔵は、明治4年(1871)に藩の廃止とともにその役目を終えました。



## 近代

## 1 旧長井小学校第一校舎

国登録有形文化財

大正3年(1914)の長井線開通時に、現在の市役所前十字路付近にあった校舎を、昭和8年に道路延長のため現在地に新築しました。木造二階建て瓦葺、舟底天井、内部正面の折り返し板階段の堂々とし



た木造校舎です。平成31年4月に交流と学びの拠点として整備され、リニューアルオープンしました。

## 2 小桜館(旧西置賜郡役所)

市指定有形文化財

明治11年(1878)12月、洋館造りの郡役所として建築されました。建築費用3,500円は西置賜郡46カ村で調達し、建設地は高台で水はけのよい現在地になりました。欧米の建築工法を取り入れながら、日本人の棟梁の手による「擬洋風」造りです。石積み



の連続基礎や全面ペンキ塗りの下見板張に「上げ下げ窓」が並ぶ外壁、バルコニーのついた神社のような玄関ポーチなど、数多くの特徴があります。周辺環境とともに復元工事が行われ、現在に至っています。

## 3 桑島記念館(旧桑島眼科医院)

くわじま きねんかん

市指定有形文化財

昭和2年、初代院長桑島五郎氏が「擬洋風」の粋を集めて竣工した建物です。ゴシック建築名残の棟飾りやドーマーウィンドウ、バルコニー付玄関などの特徴があります。

コンクリートに見えますが、実際は木造です。

当初の場所から120m曳移転され、現在に至っています。



## 4 旧小池医院

昭和6年に完成した、産婦人科医の診療室と病室です。建築様式は、ヨーロッパ17世紀のチューダー朝のスタイルです。檜の木を思わせる褐色の柱が何本も並行して直立し、梁がそれに直角に交叉して、美しい幾何学模様をつくっています。屋根を支える柱やアーチ型の窓も美しく、木組みの間にリズミカルな斜材や円状の木の装飾が並ぶ軽快なハーフティンバーの二階部分、急勾配の屋根とその



中央にそそり立つ八角形の塔とその意匠がヨーロッパ中世の建築美を作り出しています。

## 5 旧羽陽銀行

昭和9年に、現在のあら町に建てられたギリシャ風の銀行建築です。現在は個人の所有になっています。外側の太い円柱の並立している形や、柱の上



の日本でいう肘木にあたる部分の渦巻き模様も美しく、全体としてどっしりとした重厚感を与えています。

## ・銀行建築とギリシャ神殿

明治33年(1900)、ロンドンにイングランド銀行の本店が建設され、その外観には「古くはギリシャの神官が農民や商工業者に金を貸していた」という伝承から、ギリシャ風神殿造りが採用されていました。そのデザインは日本の銀行建築にも多くの影響を与え、ギリシャ神殿風の外観は国内外の多くの銀行の本店・支店に取り入れられました。昭和38年(1963)、戦時下との理由から銀行建築が禁止され、戦前最後の銀行建築となったのは大正13年竣工の日本銀行松江支店でした。(島根県松江市に工芸館「カラコロ工房」として現存)



## 8 歴史的遺構・産業遺産

### 1 森鉱山

永禄年間(1558～)に伊達家が開発させました。文政11年(1828)、森村の人口が320人と多いのは、鉱山の採掘のためと考えられます。

あるとき、坑内で落盤事故があり多数の死者が出ました。その霊を慰めるため、観音山の参道に三十三観音を祀りました。文政8年(1825)に最上川舟運で栄えた商人竹田清五郎が古虚空蔵山参道に移しました。これが東山三十三観音の由来です。小出船場があった東町が、以前の祭礼を復活させました。

昭和18年の丸通長井運送株式会社の記録には、火薬類を毎日荷車3台に積んで鉱山に運び、毎日30tのマンガン鉱石を無蓋貨車に積み込み、月間約1,000t出荷したと伝えられています。

金、銀、銅、亜鉛、硫化鉄なども採取しましたが、戦後休山しました。

### 2 野川流域金鉱

草岡の新町は鉱山職人の町でした。田尻の臼ヶ沢金山は記録にあり、鉱山跡も確認できますが、新町鉱山跡は不明です。野川溪谷の金山で、伊達の隠し金山の伝承と関係がありそうです。「伊達政宗が移封(領地替え)に際し、金山を塞ぎ道を壊し再開発されないようにした」と山形県鉱山史に記載があります。

#### ●祝瓶鉱山

鉱種名 金 銀 銅 鉛 亜鉛 硫化鉄 珪石  
野川源流五貫沢で金鉱石が発見され、山師たちは鉱区の設定で争いました。

#### ●松沢金山

言い伝えでは、寛永以前から採掘したとあります。大正元年(1912)に120名雇って稼行しましたが、第一次世界大戦後の世界恐慌で休鉱しました。

#### ●三休山鉱山

昭和29年に住友金属が稼行し、細々と採掘し、昭和51年に放棄されました。このほかに、採掘した鉱山跡が5～6カ所あります。

### 3 撞木橋

大町と栄町の間を流れるのが撞木川しゅもくがわです。室町時代の初期、当時、ここを流れていた野川の川幅が広く、そこに掛けられた長い橋が撞木橋です。

撞木橋は、二つの川の合流点に丁字形の橋をつくり、橋の形が撞木(鐘を打ち鳴らす槌)に似ていたからです。室町の中頃、摂取院の大門に向かって約170mもある木橋でした。

伊達氏の時代、宮村は衰え土橋でした。慶長4年(1599)、慶長出羽合戦のとき、直江兼続が宮村明神で戦勝祈願を行い、木橋にすると誓って、その板橋の擬宝珠(摂取院にあったとされていますが、現在消失)には、「朝散大夫兼城州刺史直江兼続寄付 干時慶長四年酉二月 大工 西江兵六」とあったそうです。今の橋は昭和6年に替えられ、先の大戦で供出した常夜灯を、戦後30周年記念事業として大町の有志が昔の「としび」形に復元し、建設省(当時)主催の「手づくり郷土賞」を受賞しました。

### 4 平山の締切堤防遺構 市指定史跡

平岩山に源を発した野川は、急流をなして南下し、その流れを平山地内の熊野山北麓の「石渚」といわれるところで北東方向に急転します。このため、大雨の度に平山地内で溢れた水が長井市の中心部を襲いました。その分流の一つが木蓮川です。とくに、宝暦7年の大洪水は大きな被害をもたらしました。そこで当時の米沢藩は、幕府の支援も得て、流れが急転する平山の野川右岸側に、20年近くの歳月をかけ、複数の堤防を築きました。

中でも、大締切堤防とよばれる石積みの堤防は基礎幅が12間(21.6m)、上端幅が7間(12.6m)、高さが1丈5尺(4.5m)、延長225間(450m)におよぶ大規模なもので、第9代藩主の上杉治憲(上杉鷹山)も2回ほど視察をしています。その一部が今も現存しており、江戸時代の石積みとあわせて、明治の大改修と昭和の改修の各堤防が3段に重層して、現在も治水機能を果たしているのは全国的に見てもきわめて貴重なものです。

## 9) 街道・峠

1 朝日軍道

上杉景勝は、越後から会津、置賜、庄内へ移封になりました。山形の最上、越後の堀家と敵対関係であるため、置賜と庄内を結ぶ「庄内直道」(朝日軍道)が必要でした。

慶長3年(1598)、草岡から朝日連峰の山頂を辿って庄内の鱒淵<sup>ますぶち</sup>(鶴岡市)へ至る山道を整備したと伝えられ、城主志駄義秀が守る酒田城へ武器弾薬を運び、庄内から金を内陸へ運びました。その後、上杉景勝が減封され、志駄義秀は慶長7年(1602)3月、庄内直道を通して米沢に引き上げたと言われていいます。以後、道は封鎖されましたが、昭和33年に葉山から直接朝日連峰に登る登山道を開設し、朝日軍道の復活と評価されました。

2 馬街道

越後街道の小国十三峠道に通じる馬街道は、小出船場までの街道だったといわれています。

台町の旧多田家西端の追分石記念碑から、片倉文六家(屋号)の前を通り抜け、街中を抜ける道を馬街道といいます。

石碑は台町が建立し、仲町裏(四ツ谷)にある伊藤武男氏の記念碑とともに、馬街道の記憶を蘇らせています。

馬街道の由来は不明です。今は狭い細道ですが、馬街道はあら町、本町境の十字路になり、片田を経て川原町の小出船場に出ました。

3 みょうじんだいらとうげ  
明神平峠 (589m)

飯豊町の萩生川沿いの林道があり、明神平峠に出られます。野川上流の右岸思入沢から、踏跡と鉋目を探し、思入沢源流の右岸杉林を登り切り、林道を西進すると明神平峠に出ます。

昭和57年、平野地区公民館の西山新道出発地の栗の標柱が建っています。林道がないとき、大平から苦勞して担ぎあげて建てました。

峠は展望がひらけ、三体連山と祝瓶山、大朝日岳と西山新道跡を望むことができます。

林道右下は、折草で西山新道開設時問屋があり、水や食料、物資の補給所でした。

4 にしやましんどう  
西山新道

入野川～明神平峠～石滝～柳生戸～村上の西山道は、越後街道に出る十三峠道より距離が短く、峠超えも3箇所済む便利のよい峠道でした。

慶長出羽合戦の直前、長期戦による領内の物資不足を見込んだ直江兼続は、この道を使って緊急に塩を運び入れたとされています。平野郷の村民は関所がなく運搬費も少ないので、藩の許可を得て西山新道を通して魚油、魚粕を運びました。

明治維新直前、最上川舟運の経費がかさんだため、長井商人17名が5千両(約5億円)を出資し、西山道を拡幅、架橋をして、新潟の村上港から京都大坂に生糸など移出し、塩や古着を運び入れました。塩の道、絹の道として期待されましたが、明治元年(1868)の戊辰戦争の際に橋や道が棄却されました。



## 5 白兔六道辻

市指定史跡

白兔の六本の道が交わったこの辻は、昭和48年に長井市の史跡に指定されました。この地名は江戸時代初期からありました。辻から北は、道智道から大井沢方面、北東は西高玉から鮎貝方面、東は白兔、南は長井町、南西は萩生から越後街道、西は葉山に通じています。辻北左に、「享保18年導師全龍院」と刻まれた六面幢があり、角々には六地藏を表す石があります。仏教の六道を示して祀られています。平安朝末、浄土宗が布教した時代に広まり、各地につくられました。

## 6 地藏峠

小出と伊佐沢を結ぶ峠で、頂上に地藏堂があったので地藏峠の名称となりました。当時の二重坂は不便で、地藏峠の方が多く利用され繁盛しており、茶店もありました。その頃、虚空蔵堂下り口の西方150間から松川の渡船があり、長井町へは地藏峠経由が便利でした。渡船は伊佐沢村と小出で経費を負担し、無賃で貨物牛馬も乗せました。平常は綱越(綱で牽引)ですが、出水の場合は危険な小舟の流越しでした。

明治19年(1866)に飯沢儀八、鈴木千代太などが館町から日の出町の道をつくり、渡船場が下流になり、地藏峠道は衰微し過去の峠道になりました。

## 7 小峠・大峠

明治以前、米沢から荒砥へ向かう道の中街道といました。米沢→大塚→下伊佐沢→岩穴→大峠→杉沢→荒砥の経路です。大石はその街道があり、交通の要衝で、茶店や宿屋もあり、60世帯が暮らしていました。最上領とも境界が接し、道も通じており、漆山を経て宮内にも近く、慶長5年(1600)の直江兼続の長谷堂攻めには、この道筋を進軍したと逸話も残されています。

現在は、山形工科短期大学や不伐の森、ジュンサイ採りで有名な大石沼があります。二つの峠は今、やぶ道になっていますが、その近くを置賜東部線道路が通っています。

## 8 二重坂

地形から見て上の台側に坂道があり、南流する谷川が交差して下り道になり、登り返すジグザグの狭い道から日の出町に下るので、二重坂の地名になったと思われます。明治21年(1888)、有料の木橋大橋が完成。明治41年(1908)に改修され、大正12年(1923)に県道編入し、大橋(伊佐沢橋)も県道編入になりましたが、昭和4年の洪水で橋が大破してしまいました。

昭和6年には鉄鋼ワーレン式トラス4連の鉄橋が最上川河川敷内に完成し、昭和30年には頂上を3m掘削し通行が容易になりました。また、平成19年のさくら大橋架橋で二重坂が拡幅されました。

# 10 伝承・民話

## 1 久保のお玉

平安時代に、坂上田村麻呂がエミシを征伐するために東北に来たときの伝説が多く残されています。長井にも總宮神社、草岡の大明神ザクラ、そして伊佐沢の久保ザクラの伝説があります。伝説は次のような語りで始まっています。

「將軍田村麻呂は陸奥、出羽のエミシを征伐して千軍万馬に疲れた身を、わが郷土置賜郡久保の長者の宿に暫時軍旅を解くこととなった。長者の住家は鄙には珍しく深い濠をめぐらし、城郭のようであった。この長者の娘お玉は、容色才能二つながらすぐれ……後略」

久保氏の娘お玉は、親身になって將軍をもてなしました。將軍は喜び、しばらく滞在していましたが、エミシの反乱が鎮まると京都に帰りました。その後、娘は病氣にかかり、將軍の面影を偲びながら、春も浅いある日の明け方に亡くなりました。それを聞いた田村麻呂は娘の死を悲しみ、摂津の真野山の桜を贈って娘の墓に植えさせました。その木が成長し、久保ザクラといわれ今も美しい花を咲かせています。



## 2 卯の花姫伝説

平安時代、奥州に拠点を置く安倍氏と源義家が激しい戦いを繰り広げたことは、長い間民衆の間で語られてきました。この頃、安倍貞任の娘である卯の花姫は宮村館に居を構えていました。安部貞任の勢力が衣川<sup>ころもがわ</sup>を越えて、置賜にまで及んでいたかは明確ではありませんが、次のような伝説が残っています。

安倍貞任の娘卯の花姫は、女でありながら兵馬の調練を行っていました。ある時、卯の花館の鎮守別当である妙澄に、調練が速やかに成就するよう仏(馬頭観音)に祈願させました。その夜、夢の中に容姿の立派な馬頭観音が登場したのです。夢に現れた馬頭観音を羽黒の僧に彫らせ、遍照寺に奉納したそうです。

安倍貞任の娘卯の花姫は、長井地方を治めていました。長井に攻めてきた源義家(八幡太郎義家)は「無益な争いをしたくないので和睦にしたい」と卯の花姫に伝え、源義家を信じた卯の花姫は、安倍の軍勢を引かせました。ところが、源義家は言葉とは裏腹に長井へと軍勢を進め、安倍貞任を打ち取りました。

卯の花姫が、「源義家にだまされ、父を殺したのは私だ」とさめざめと泣いているとき、朝日、祝瓶の堂坊の僧衆が駆けつけてきて、「義家の兵は間道を超え、祝瓶の堂坊を焼き払い、1万ばかりの源義家の軍勢がまもなくここに攻めて寄せます」と知らせました。卯の花姫は、もうこれ以上生き延びることはできないと考え、綾の表着で頭をおおい、絶壁の上から三淵の真ん中へ身を投げ、相従う女房、局34人の姫もつぎつぎと飛び落ちました。その後、卯の花姫の魂は野川の龍神となったといわれ、長井の獅子舞は、龍神が總宮神社の例大祭に招かれ、野川の流れを下る姿であると伝えられています。



## 3 宥日上人

長井の生んだ名僧に宥日上人がいます。応永3年(1396)に東五十川生僧の豪農村上新兵衛家に生まれました。その家の「おかま」という女は「どうか私に男児を一人授けてください」と、毎日観音様にお祈りしたら願い通り男児(宥日上人)を安産しました。

8歳にして大般若經六百巻を写しとるなど、若い時から才能を発揮します。その後、高野山で修業して、日本でも有名な高僧になりました。宥日上人の加持祈禱は、密教修行者としてきびしい修行をして身につけたものでした。日本各地に出かけ、病気の治療、安産、雨乞い、豊作祈願、防火鎮火などで評判をよんでいきます。とくに、防火鎮火の祈禱の名人として有名になり、郡内に多くの真言宗のお寺を建て、遍照寺(横町)の発展に尽くしましたが、文明4年(1472)正月に亡くなりました。晩年は宮河原町(現在の栄町)に常楽院を建て、そこを隠居所として暮らしていたそうです。

現在でも、東五十川に産湯を使った池が残っており、毎年1月になると、近郷近在から、池の水をもらいにやってきます。その水を屋根にかけると、決して火災に遭わないといわれているそうです。



【「宥日上人産湯井」の石碑(東五十川)】



## 4 ながまぎゅうおう 長沼牛翁

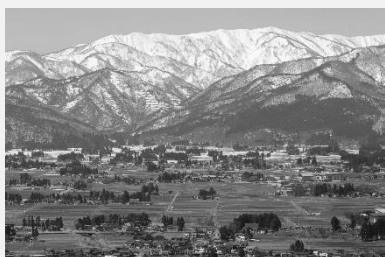
長沼牛翁は太沖ともいい、宝暦11年(1761)に生まれました。生家は十日町の太物商(現在の長沼酒造)で肝煎(現在の村長の役)も務めていた家柄でした。長男だったので、当然家業の呉服屋を継ぐ運命にありましたが、文化、医学への憧れを捨てることができず、家業を弟に譲って江戸に出ていきます。そこで蘭学(西洋の学問)を学び、医学、漢方医学などを学び医者として生活していました。しかし、暇をつくっては全国の旅に出て、その間に漢学、和楽、絵画を身に付けました。

歳をとってからは長井に帰り、撞木橋(現在の宮地区)のたもとに庵をつくり、医を業とする一方で、今まで旅先で見聞したことなどをまとめ、随筆集「牛の涎」60冊に書きつづりました。彼は、狭い日本のことだけでなく、蘭学を学んで世界に目を向けた先覚者であり、長井の生んだ偉大で博学な随筆家でありました。



## 5 おけさ堀の物語

西根草岡から葉山に登る途中、ちょうど尾根に達したところの左手に「おけさ堀」とよばれている堀があります。山かげの水を前山に落とすための堀で、勘三郎が妻おけさと艱難辛苦を克服して掘ったと伝えられています。



測量技術や機材もない時代に、自分の経験と勘に頼るしかないわけで、明かりを数人に持たせ、高低などを測りながらの工事であったといえます。上方から勘三郎が、下方からおけさが手分けして掘り進みましたが、二人が掘ったところは食い違いが出て、落差が生じ滝になりました。村人はこの滝を「おけさ滝」と名付けました。

水不足に悩む草岡村の百姓たちを、何とかして救いたいという願いが叶いました。草岡赤地藏堂には、おけさと勘三郎を讃える碑がありますが、寛文10年(1670)と刻まれています。

## 6 すわぜき 諏訪堰

長井市の最上川にかかる長井橋の上流100mのところに、諏訪堰の頭首口(取水口)があり、そこから、水路が北に向かって通っています。最上川の水を分水し、最上川東岸の平地を森、浅立、広野、畔藤へと流れて、水田に配水する堰です。江戸時代の初期に米沢藩では、水田開発をおおいに奨励しましたが、長井では、浅立の沼沢伊勢と広野の新野和泉の二人が、この堰の開発にかかわりました。

工事は最上川の河原を通るところもあり、水漏れなどで難航しましたが、二人と村民は諏訪神社、熊野神社に願いをかけ、ようやく完成したと伝えられています。この堰の完成で新しく開田された新田は、面積にして266ha(3千9百石分)という広大なものです。

多くの百姓が二人の努力に感謝しました。諏訪堰はその後何度か手を加え、頭首口は平成25年に新しく改修されました。



【諏訪堰の頭首口】

## 7 栃の木堰

西山の東斜面は断層崖となっており、急で流れが短く、夏は涸れる川になるので、水田化は困難でした。その斜面に広がる西根の寺泉、川原沢、草岡などは微高地が多く、水には大変苦労しました。そうした原野を開拓して、水田化しようと江戸時代の承応年間(1652年、3代上杉綱勝の頃)に五十川の手塚源右衛門が発起人となり、成田、五十川、寺泉の3ヵ村が中心になって始められました。

野川から取水し、途中で交差する西根村の三合田川などの沢水も入れています。南西から北東へほぼ直線コースをとっています。ところが、水を通す工事は思わぬ難所に出会い、懸命に手をつくしましたが進まず、藩に約束の日が迫ってきました。



【おせきの塔】

源右衛門の家には、おせきという下女がおりました。おせきは源右衛門の苦労に心を痛め、未婚の娘が人柱にたつとどんな難工事でも完成するという村人の話を聞いて、人柱になることを願い出ました。その夜遅く、おせきは川の淵に身を投げました。

村人の奮起により堰は完成し、広く五十川一帯の田を潤すようになりました。しかし、源右衛門はおせきの人柱を承知のうえで黙認したということで、ひのき 檜だ 板はりつけ の刑に処せられ、家は断絶しました。

## 8 大喰い惣兵衛

「この里に惣兵衛という者あり。剛力にして餅を好み、五升餅を食す」という書き出しで、「牛の涎」に紹介されています。

草岡村の大沖に、孫田惣兵衛という者がいました。慶長3年(1598)に直江兼続が、置賜と庄内を結ぶ朝日軍道を開いたとき、その作業に従事して、働いたという話です。惣兵衛は餅食い惣兵衛といわれたほど餅が大好きで、この作業に従事するとき、一人で5升の餅を全部食べて山に登りました。はじめの二日間は腹いっぱい苦しく、中三日は丁度良く、後の二日は腹が減ってやっとのことで家に

帰ったといえます。七日間、一切何も食べなかったのです。

朝日軍道を切り開く工事は、途中にいくつかの深沢や急な坂があり、村からかり出された農民はおおいに苦しみましたが、このときも惣兵衛は大木を打ち倒して架橋し、昼夜兼行で働きました。そうした働きもあって、わずか七日で完成したといわれています。世話役からは大層ほめられ、槍を二筋頂きました。惣兵衛宅には、槍やそのときに使われた大臼おおうすが、今も残っているそうです。

